

山梨市文化財調査報告書 第11集

なか く せぎ
中久堰遺跡

—山梨市牧丘町室伏地内における乙ヶ妻配水池
建設にともなう発掘調査報告書—

2008年3月

山 梨 市
(財)山梨文化財研究所

なか く せぎ
中 久 堰 遺 跡

—山梨市牧丘町室伏地内における乙ヶ妻配水池
建設にともなう発掘調査報告書—

2008年3月

山 梨 市
(財)山梨文化財研究所

序

本書は、山梨県山梨市牧丘町室伏に所在する中久堰遺跡の調査報告書です。

本調査は、山梨市が行う統合簡易水道事業、乙ヶ妻配水池築造工事に先立って行われました。工事の範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地「中久堰遺跡」の範囲であるため、市教育委員会において平成19年8月に確認調査を行ったところ、縄文・平安・中世の遺物を含む層および当時の生活面が確認されました。

このため、山梨市水道課において財団法人山梨文化財研究所に委託し、本調査を行なうこととなりました。

調査は、工事により掘削される部分の171.8平方メートルと、ごく狭い範囲で行われましたが、その中で、縄文時代後期の敷石住居跡1軒が発見されました。

日当たりの良い斜面を掘り込んで平らに造成し、その面に平らな石を敷いて床面を作っています。こういった住居を敷石住居と呼び、縄文時代後期に特徴的なものです。使用されている石は、離れた場所から大量に運んできたものと思われます。縄文時代後期のこの地に集落が形成されていたことが明らかとなり、大変貴重な発見であるといえます。

特に敷石住居跡は県内最大級の規模を持ち、この住居が集落の中心的な人物の住居であったことがうかがえます。

山梨市の牧丘地域における縄文後期の集落跡としては、昭和48年に発掘調査が行われた古宿遺跡（昭和51年3月31日指定、山梨市指定史跡）が知られていますが、今回の調査においても、これに匹敵する成果を上げることができたといえます。

山梨市では平成18年度に「山梨市フィールドミュージアム構想」を策定しております。

この構想は地域固有の自然や歴史・文化といった「市民が誇るべき宝」を再発見し、これを資源として魅力あふれるまちづくりを行っていくというものです。

今回の調査成果は、まさに地域が誇る宝として市民全体で共有すべきものであり、新たな創造に資するものと考えております。

末文ながら、調査を担当いただいた財団法人山梨文化財研究所の皆様、地域住民の皆様はじめ関係各位に心から感謝を申し上げ、序といたします。

平成20年3月

山梨市長 中村照人

例 言

1 本書は山梨県山梨市牧丘町室伏1439番地2所在の中久保遺跡の発掘調査報告書である。

2 本調査は総合開拓水道事業における乙ヶ瀬配水池建設工事に伴い、山梨市より委託を受けた山梨文化財研究所が実施した。調査にあたっては山梨市教育委員会と協議のうえ山梨市教育委員会指導のもと、実施した。

3 本書第1章、発泡粘土に関して著名貴彦（山梨県立博物館）に分析・執筆していただいた。その他の図版執筆・写真撮影・編集は鶴原功一（山梨文化財研究所）が行った。

4 発掘調査における基準点測量、ポール撮影およびオラン画像作成、全体図作成業務は御園ノブランニングが実施した。

5 本書に関する出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。

6 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

村本周三・遠部慎・小林謙一・西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、大内千年内（千葉県教育委員会）、鈴木稔・河西学（山梨文化財研究所）、香名貴彦・植月洋（山梨県立博物館）、河野秀亮（山梨県考古学学会）、森谷忠・柴田直樹（テクノプランニング）、村上隆（奈良文化財研究所）、谷口康浩（国学院大学）、合田恵美子（都木邑文化振興財团）、三枝哲雄（三枝興業）、野沢昇平・三澤達也（山梨市教育委員会）、若月清・根藤昭彦（山梨市水道課）、鶴原功一、岸本美苗

凡 例

1 遺跡全体図におけるX・Y軸値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標値である（世界測地系座標）。各遺構平面図中の北を示す方位は座標北である。

2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

堅穴 1:60

炉 1:30

全図 任意

土器・石器 1:3

土製品 1:2

石築 2:3

3 遺構図版中の遺物間実線は接合した2点の接合関係を示す。

4 上図説明における土色表示は農林省水産技術会議会議規局監修（新版標準上色帖）（1990年度版）を使用した。

5 遺構図版中の遺物番号は写真版番号。遺構図版の遺物番号と一致する。

6 本書団1は国土土地院発行の1/200000地勢図「甲府」、1/25000地形図「塙山」

「川浦」、図2は1/25000地形図「塙山」「川浦」を使用した。

7 本文の註・参考文献については各節（章）ごとにまとめた。

本文目次

序	
例 言	
本文目次	
本文中挿図目次	
表目次	
本文中挿写真目次	
図版目次	
写真図版目次	
本文中挿図目次	
本文中挿写真目次	
図版目次	
写真図版目次	

本文中挿図目次

図1 中久保遺跡の位置	2
図2 山梨市牧丘町内の遺跡	5
図3 墓地と周辺	7
図4 試掘坑配置図及び墓標	8
図5 遺跡全体図	9
図6 釐面セクション	9
図7 全体図	11
図8 1号堅穴	12
図9 置と住居プラン	13
図10 柱穴の変化	14
図11 1号配石	14
図12 遺物分布図	16
図13 焼内出土の発泡粘土	21

表 目 次

表1 山梨市牧丘町の遺跡	6
表2 土器観察表	17
表3 石器観察表	19
表4 土製品観察表	20

本文中挿写真目次

写真1 焼内出土の発泡粘土	21
第1図 1号堅穴	25
第2図 1号堅穴	26
第3図 遺物出土状況I	27

図 版 目 次

第4図 遺物出土状況(2)	28
第5図 遺物出土状況(3)	29
第6図 遺物(1)	30
第7図 遺物(2)	31
第8図 遺物(3)	32
第9図 遺物(4)	33
第10図 遺物(5)	34
第11図 遺物(6)	35
第12図 遺物(7)	36
第13図 遺物(8)	37
第14図 遺物(9)	38
第15図 遺物(0)	39
第16図 遺物(1)	40
第17図 遺物(2)	41
第18図 遺物(3)	42
第19図 遺物(4)	43
第20図 遺物(5)	44
第21図 遺物(6)	45

写真図版目次

図版1 調査地点遠景(西より、家の前付近)・表土剥ぎの状況・作業風景・近世以前のピット半裁状況・1号堅穴上層	
図版2 ピット群検出状況・1号溝・1号堅穴確認状況・1号堅穴検査状況・1号堅穴設定のペルト・1号堅穴出土付近調査状況・ポール撮影風景	
図版3 1号堅穴上層検出状況・1号堅穴出土入口部の配石・1号配石・黄褐色土の確認(白線の内側)・炉周辺の礫出土状況・1号堅穴内部の掘り下げ	
図版4 注山土器出土状況・1号堅穴壁面の調査・1号堅穴の堆積土層・1号堅穴壁面の十層堆積状況	
図版5 円窓検出状況・ベルトの再確認状況・周壁礫・敷石・配石の検出状況・土器出土状況・カヤ状炭化物出土状況	
図版6 1号堅穴奥壁の円窓出土状況・炭化物出土状況・部分散石検出状況・周壁礫をはぐ除去し、壁面を確定した状況	
図版7 1号堅穴円窓出土状況・1号堅穴柱穴を探る・1号堅穴内の敷石・1号堅穴通路部分の敷石・1号堅穴壁面寄りの敷石・1号堅穴東壁の敷石・中央の敷石敷設状況	
図版8 1号堅穴完掘状況・1号堅穴炉	
図版9 1号堅穴完掘状況・1号堅穴炉・調査終了状況(北より)	
図版10 遺物(1)	
図版11 遺物(2)	
図版12 遺物(3)	
図版13 遺物(4)	
図版14 遺物(5)	
図版15 遺物(6)	
図版16 遺物(7)	
図版17 1号堅穴炉内出土発泡粘土およびX線写真・発泡粘土の層別部分析データおよび分析位置・発泡粘土の白色部分析データおよび分析位置	

第1章 経過

第1節 調査の経過

山梨市は山梨県東部、甲府盆地北東側に位置する狭東地域の中核都市である。北側、長野県境に連なる奥秩父山塊から流下する笛吹川の上・中流域にあたり、山間地を多く抱えた地域でもある（図1）。平成17年3月、山梨市・牧丘町・三富村が合併して新山梨市となった。

山梨県では笛吹川支流の琴川に水害予防、灌漑飲料水の確保、水力発電等のための多目的ダム建設を計画、山梨市牧丘町柳平地区に琴川ダム建設を進めてきた。

山梨市では統合簡易水道事業として、琴川ダムからの給水に関わる配水池建設を牧丘町室伏乙ヶ妻地内に計画した。この地点は中久坂遺跡として遺跡地図に登録された遺跡の一部に相当するため、山梨市教育委員会では事前調査としての試掘調査を平成19年8月1・2日に実施した。

試掘調査は予定地に3か所のトレンチ（幅1m、長さ約5m）を設定（図4）、遺構確認面まで掘り下げたところ、T1トレンチ内で炭化物が多量に出土し、古代の焼失住居跡に伴うものと推測された。またT2・T3トレンチでは地表下深さ70cm付近で暗褐色上面中に黒色土の覆土をもつピット、土坑状ピットが複数確認でき、近世以降の遺構と判断された。

市教育委員会では施設建設に伴い影響を受けるT2・T3付近の本調査が必要と判断、財山梨文化財研究所へ調査を委託することになった。山梨市では研究所と委託契約を締結し（平成19年9月）、平成19年9月5日から平成20年3月25日までを委託事業の履行期間として調査、報告書作成を行うことになった。

第2節 発掘作業の経過

調査地点は農道に面した果樹園（リンゴ）で、南西向き斜面を切り盛り造成によって畑地とした段状地形である。

調査は、平成19年（2007）年9月8日から10月24日まで、のべ27日間実施した。調査参加者は以下の通りである（敬称略）。

秋山高之助・伊井實・大芝大雄・小沢正臣・加賀美昌友・窪田信一・坂本行臣・飯田勝夫・長沢正義・長谷川規愛・保坂恭雄・宮川昌蔵・萩原忠

重機による表土剥ぎの際、遺構確認面を再確認したところ、市教育委員会が確認面とした調査予定層より下層から縄文土器片が多数出土し、縄文時代の遺構確認面が最深部で地表下220cmに存在することがわかった。従って近世以降のピット群と下層の縄文時代包含層の2面調査の必要性が判明した。調査の結果、調査区南側から大型の敷石住居跡（縄文時代後期）が1軒見つかった。急斜面に円形の堅穴を掘り込んで居住面を構築し、一部敷石を敷設した住居跡であった。

住居内には大小の礫が多数落ち込み、一部壁面に積み上げたように存在したことから周堤礫の可能性を考慮しつつ、礫を記録しながら慎重に調査を進めた。また床面、壁面が不明確で、火災住居のため炭化物、焼骨が散在するなど特殊な出土状況を示したことから調査は難航した。

作業内容は以下のとおり。

平成19年（2007）9月8日（土） 重機による表土剥ぎを実施。調査範囲を図面から確認し、市教委の試掘坑のデータにもとづき削除したところ、遺構確認面として市教委が判断した面の下部に黒色土が厚く堆積し、その下層に縄文土器片を伴うことが判明。

9月9日（日） 表土剥ぎの続きを、本日で表土剥ぎは終了する。調査区の壁面を一部精査。

9月15日（土） 作業員による精査（じょせんがけ）開始。帝京科学大学の博物館実習生による考古学実習を実施。壁面精査。遺構外遺物の光波測量機による取り上げなど研修。

9月16日（日） 精査のうち全体写真撮影。一部に黒い谷状の落ち込みを確認（のちに敷石住居と判明）。遺物取り上げ。上層ピットを半裁。壁際にトレンチを設定して遺物の出方を見る。

9月17日（月） 上層ピットの覆土観察、完掘、実測。黒色部分を掘り下げる。

9月26日（水） 遺物類搬入。調査区にサブトレンチを1本入れ、敷石面を確認（1号堅穴）。敷石住居を想定して調査を進める。

9月27日（木） 1号堅穴（1堅と略）の範囲確認、暗褐色砂質土の地山中に黄色土で塗抹された円形黒色土堅穴範囲を確認する。

10月1日（月） 1堅にベルトを設定し、黄色土面まで掘り下げ、遺物取り上げを行う。

10月2日（火） 1堅ベルトのセクション同化の

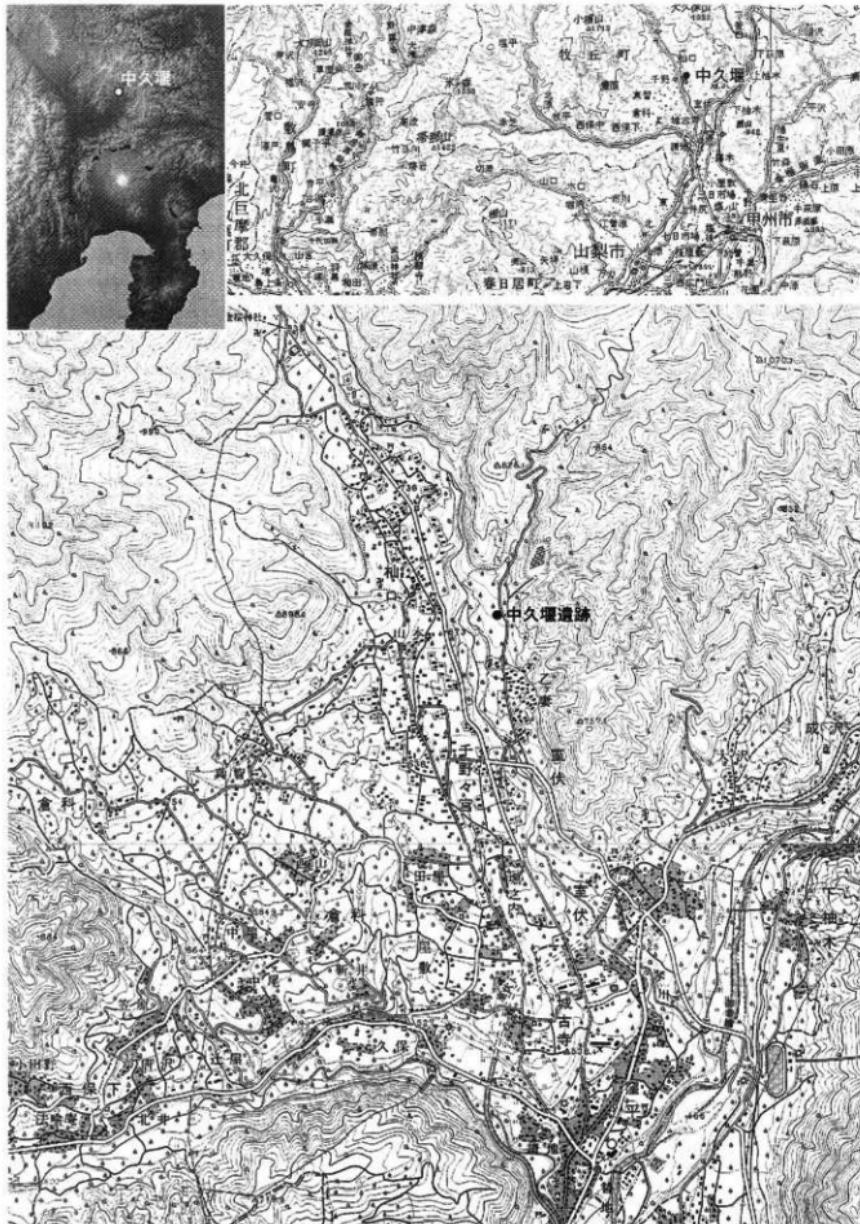


図1 中久坂遺跡の位置（上右：1/200,000、下：1/25,000）

のちベルト除去、礫を残して遺物上げ、ポール撮影による写真撮影実施。1堅内および周囲の黄褐色土堆積については堅穴中央がくぼみ、壁寄りで高くなっていることから、住居の土葺きあるいは周堤帯の崩落土と想定。

10月3日(水) 1堅内の敷石、周堤跡以外の礫をはずしながら掘り下げる。

10月4日(木) 1堅北側の黒色土包含層を掘り下げる。南壁際で敷石の一部らしい配石を検出。住居かどうか判断に迷ったが、仮に2号堅穴(2堅)とする(のちに1号配石とする)。

10月5日(金) 1堅の床面を追う。壁が不明確であったため、当初周堤帯と考えた壁にサブトレチを入れたところ、黄褐色土が堅穴壁際に堆積した状況を観察でき、堅穴の範囲がさらに広がることがわかる。

10月10日(月) 1堅の床面、壁際で焼土、炭化物など検出。火災住居と推定。

10月11日(木) 1堅のポール撮影による全景写真撮影。堅穴内の覆土礫を実測しながら除去する作業を繰り返す。

10月12日(金) 床面上、東壁近くで注口部を欠損した注口土器検出。礫をある程度除去し、再度1堅の全体写真を撮影。その後、周堤帯と考えた黄褐色土の堆積状況および壁を見極めるため、放射状のベルトを壁際に5本設定し、掘り下げる。床面より焼骨、炭化物など出土。

10月13日(土) 1堅の奥壁寄りのところで床面よりやや浮いた位置で卵大の小円礫が直線的に並んで出土。

10月14日(日) 床面を精査しながら1堅壁を掘り進む。

10月15日(月) 1堅東壁近くより土偶出土。遺構外のピット完掘。ポールによる全景写真撮影。

10月16日(火) 1堅の床面を精査しつつ壁面を掘り進む。

10月17日(水) 土製品、土偶(無脚タイプ)出土。住居の壁をほぼ掘り上げる。

10月18日(木) 壁付近の精査。柱穴を探すがはっきり出ない。

10月19日(金) 柱穴を探し一部半裁するが、雨のため作業中止。

10月20日(土) 床面を精査し、柱穴をいくつか確認する。

10月21日(日) 柱穴の半裁、完掘へ。柱穴上層に柱が炭化した炭化材が残るピットが複数存在する。ミニチュア土器出土。

10月22日(月) 炉周辺の敷石除去。柱穴確認。壁の探査。

10月23日(火) ピット完掘。炉半裁、炉体土器確認。実測、取り上げ。炉体土器直上より発泡粘土出土。ピット実測。全体写真撮影。荷物の片づけ、撤出。

10月24日(水) 朝、遺跡遠景写真、全体写真などを撮影し、現地調査を終了する。

第3節 整理等作業の経過

現地での発掘調査終了後、報告書作成のための整理作業を山梨文化財研究所(笛吹市石和町)で実施した。

整理は遺物洗浄、注記、接合、復元ののち、実測遺物の選別、実測、トレース、図版作成の順で行い、原稿執筆、試料分析、図面整理、取り上げデータ・写真整理を並行して実施した。遺物の注記にあたっては、例えば「中2390」(中久保遺跡 取り上げNo 2390の意)と記入した。注記のうち土器であれば部位(口縁部・胴部・底部・有文・無文等)で分類し、接合関係をみたのち、実測遺物を抽出し、実測遺物以外の資料は分類状態で収納した。なお、ほとんどの遺物には出土位置のデータがあり、取り上げ地点不明のいわゆる一括遺物は少ない。

整理作業参加者は次の通りである(敬称略)。

矢房静江・斎藤ひろみ・須田泰美・角屋さえこ・小林典子・小林祐子・手塚理恵・手塚由美・小沢恵津子・田中真紀美

遺構図、遺物出土地点データの編集については現地で光波測量によって入力したデータと、業者委託によってポール写真から炭化したデータを合成し、編集ソフト「遺構くん」(アイシン精機)で編集、プリントアウトし、版下図とした。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

山梨市牧丘町は笛吹川上流、右岸に位置し、奥秩父山塊の南東にある小柄山（1713m）の南東山麓を中心に広がる山あいの地域である。笛吹川の支流、琴川と鼓川の間に緩やかな南東向き斜面が開け、水に恵まれた日当たりの良い地域で、「巨峰」葡萄を特産品とする。

中久堰遺跡は琴川左岸の室伏地区、「乙ヶ妻の桜」で有名な乙ヶ妻集落の北250mに位置する。大久保山（1323m）の山裾が琴川に迫る地域で、琴川に流れいくつかの小河川の間の小台地（河岸段丘）上にある。琴川とは比高差約50m、直線距離約200mで、川を見下ろす高台に立地するが、遺跡から河床を見る事はできない。調査地点は南西向きの急斜面で、下方のやや緩やかな河岸段丘面へと続いている。遺跡は下方の段丘面を中心に分布し、調査地点は遺跡の縁辺部に相当する。遺跡内では最も標高が高く、遺跡全体を見下ろす地点である。現在、調査地点脇に室伏から袖口へ通じる農道が通過し、また北東側へ上る林道があって、調査地点の脇は三叉路の分岐点となっている。林道沿いには「中久堰」という水路が流れ、これが遺跡の名称となつた。またこの一帯は小字名を「中久根」と呼ぶ。

調査地点の現状は段状のリンゴ畑で、尾根状地形を削平して平坦なテラス面を作り出している（図3）。標高は676.5m。

第2節 歴史的環境

山梨市合併以前の旧牧丘町は、昭和29年に諏訪村（町）、中牧村、西保村が合併してできた町である。旧牧丘町には笛吹川にはほぼ沿うように甲府方面と秩父方面とを結ぶ秩父往還が通過し、現在は国道140号線として、平成10年（1998）に開通した雁坂道への入口となっている。古くは金峰山へ至る信仰の道、御岳道が牧丘町崖平を出発点として、琴川および鼓川に沿うように北上する袖ルート、西保ルートがある。さらに勝沼方面から山梨市、甲州市塙山を抜けて崖平へ至る道筋も古くから存在し、その一部は鎌倉街道、行者街道等の呼び名をもつ。牧丘町崖付近はそれらの道の結節点にあたる交通の要衝の地で、かつては国境に近いことから信州・埼玉方面とも交流の深い地域として栄えた。

「中牧」という古くからの地名が示すようにかつ

て馬牧が多数存在したといわれ、また平安末から鎌倉初に活動した安田義定の要害と伝えられる小田野山城跡が鼓川左岸の小田野山に残る。また縄文時代を中心とした遺跡分布は綿密な踏査によって数多く知られている（図2）。

旧牧丘町域の遺跡分布は主に琴川流域、鼓川流域とその中間地域に分けられる。中久堰遺跡が所在する琴川流域には山岳寺院跡の金桜神社奥社地遺跡（山梨市2006）をはじめとする遺跡が分布するが、左岸地域は山裾に近いため遺跡分布がやや少なく、琴川および支流の小河川に面した台地上に縄文時代の遺跡が点在している。

旧牧丘町域では縄文早期、押型文土器の分布が濃密で、小野正文・信藤祐仁（1979）によれば、井戸川、奥豊原、鈴の宮、須川道東、上の原、高野、奥破魔射場の7遺跡を数える。

中久堰遺跡と同様な縄文時代後期の遺跡に注目すると、最もよく知られるのは古宿道の上遺跡（牧丘町1981、図2-10）である。昭和48年、西保保育園建設の際に発見された遺跡で、後期縄之内2式期の部分敷石をもつ敷石住居跡が見つかった。町史跡として保存施設に大切に保存され、山梨県内では早い段階で保存措置が講じられた遺跡として知られる。鼓川左岸の南向き斜面にあり、縄文後期の集落立地としては中久堰遺跡と共通点がある。

また未調査ではあるが、縄文後期の遺跡として古西源寺遺跡（称名寺式期）、奥破魔射場遺跡（堀之内1式期）が「牧丘町誌」に掲載されている（小野1980）。いずれも古宿道の上遺跡周辺に分布し、後期遺跡が集中分布している。

そのほか旧牧丘町内で発掘調査が実施された遺跡としては曲田遺跡、奥豊原遺跡、金桜神社奥社地遺跡がある。

曲田遺跡（図2-85）では縄文時代前期3軒、古墳時代前期13軒、平安時代末10軒の竪穴建物跡が検出されている（大崎1992）。奥豊原遺跡（図2-43）では縄文時代早期2軒、炉穴3基を検出し、三戸式、押型文土器などが出土している（十菱1998）。金桜神社奥社地遺跡は古代末～中世前半を中心とした山岳寺院跡で、現在袖口にある中牧山雲峰寺、金桜神社の前身寺社があった場所と伝えられる（山梨市2006）。

図2 山梨市牧丘町内の道路

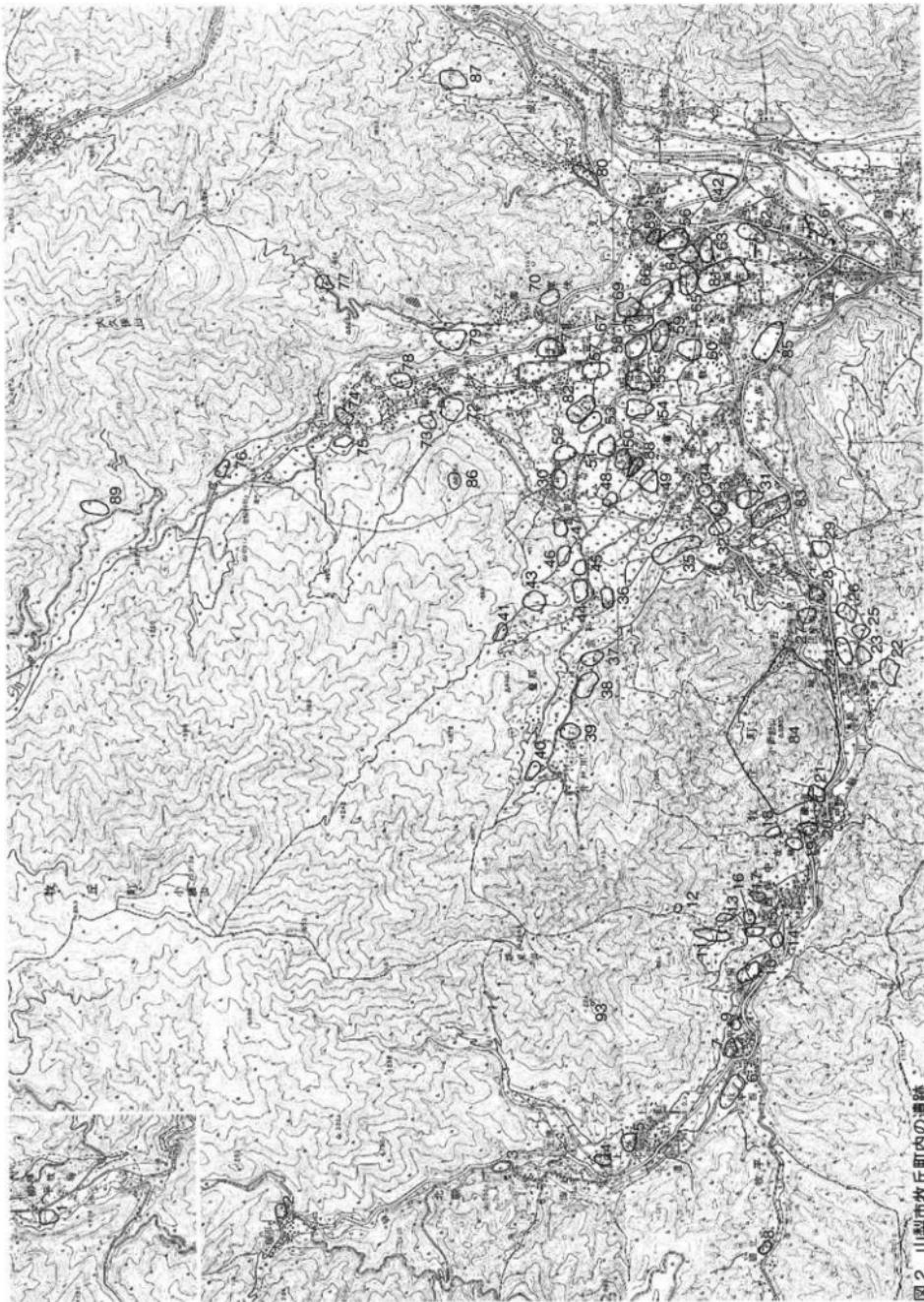


表1 山梨市牧丘町の遺跡（91～95は参考遺跡）

番号	遺跡名	地 点	性 質	時 代	備 注	番号	遺跡名	地 点	性 質	時 代	備 注
1	五郎	牧布地	山梨市牧布地御前平	縄文		49	田畠	牧布地	山梨市牧布地	縄文・平安	
2	上ノ山	牧布地	山梨市牧布地御前平	縄文・平安		50	西山	牧布地	山梨市牧布地西山	縄文・平安・一戸世	
4	里	牧布地	山梨市牧布地上野原	縄文		51	山原	牧布地	山梨市牧布地山原	縄文・平安	
5	上野原	牧布地	山梨市牧布地上野原	縄文		52	高尾	牧布地	山梨市牧布地高尾	縄文・平安	
6	中野	牧布地	山梨市牧布地中野	縄文		53	大石	牧布地	山梨市牧布地大石	縄文	
7	川原	牧布地	山梨市牧布地川原	縄文		54	上原	牧布地	山梨市牧布地上原	縄文	
8	猪の塚遺跡	牧布地	山梨市牧布地猪の塚	平安		55	上原田	牧布地	山梨市牧布地上原田	縄文・平安	
9	再兴	牧布地	山梨市牧布地再兴	平安		56	西谷	牧布地	山梨市牧布地西谷	縄文・平安	
10	立馬遺跡の上	牧布地	山梨市牧布地立馬の上	縄文・平安	1973年調査	57	上野田裏	牧布地	山梨市牧布地上野田裏	旧石器・縄文・平安・一戸世	
11	立馬	牧布地	山梨市牧布地立馬	縄文・平安		58	田原	牧布地	山梨市牧布地田原	縄文・平安	
12	奥須賀村塙	牧布地	山梨市牧布地奥須賀村上	縄文・平安・中世		59	田原A	牧布地	山梨市牧布地田原A	縄文・平安	
13	奥須賀村塙	牧布地	山梨市牧布地奥須賀村上	縄文・平安・中世		60	田原B	牧布地	山梨市牧布地田原B	縄文・平安	
14	古石遺跡	牧布地	山梨市牧布地古石	縄文		61	北裏	牧布地	山梨市牧布地北裏	縄文・平安・一戸世	
15	新井村塙	牧布地	山梨市牧布地新井村	縄文		62	大木原	牧布地	山梨市牧布地大木原	縄文	
16	新井村塙	牧布地	山梨市牧布地新井村	縄文		63	大木原	牧布地	山梨市牧布地大木原	縄文	
17	上原	牧布地	山梨市牧布地大木原	縄文・平安		64	鶴ヶ淵	牧布地	山梨市牧布地鶴ヶ淵	縄文	
18	立木遺跡	牧布地	山梨市牧布地立木	縄文		65	幡神御氣	牧布地	山梨市牧布地幡神御氣	縄文	
19	立木遺跡	牧布地	山梨市牧布地立木	縄文・平安		66	幡神御氣	牧布地	山梨市牧布地幡神御氣	縄文	
20	立木遺跡	牧布地	山梨市牧布地立木	縄文・平安		67	大木原	牧布地	山梨市牧布地大木原	縄文	
21	戸戸置	牧布地	山梨市牧布地戸戸置	縄文・中・後漢		68	原ノ原	牧布地	山梨市牧布地原ノ原	縄文	
22	八幡山	牧布地	山梨市牧布地中八幡山	縄文・平安		69	横坂	牧布地	山梨市牧布地横坂	縄文・平安	
23	荒合	牧布地	山梨市牧布地荒合	縄文・平安		70	砂利原	牧布地	山梨市牧布地砂利原	縄文	
24	中野原	牧布地	山梨市牧布地中野原	縄文		71	高尾原	牧布地	山梨市牧布地高尾原	縄文・平安	
25	中野原山	牧布地	山梨市牧布地中野原山	縄文・平安		72	鶴ヶ淵	牧布地	山梨市牧布地鶴ヶ淵	縄文・平安	
26	西原下丸山	牧布地	山梨市牧布地下丸山	縄文・平安・中世		73	船口西山	牧布地	山梨市牧布地船口西山	縄文・平安	
27	大坂城	牧布地	山梨市牧布地中坂城	縄文・平安・中世		74	東上	牧布地	山梨市牧布地東上	縄文・平安	
28	北原	牧布地	山梨市牧布地北原	縄文・平安・中世		75	上船口	牧布地	山梨市牧布地上船口	縄文・平安	
29	北原	牧布地	山梨市牧布地北原	縄文・平安・中世		76	船口東山	牧布地	山梨市牧布地船口東山	縄文・平安	
30	高尾	牧布地	山梨市牧布地高尾	縄文		77	大久保	牧布地	山梨市牧布地大久保	縄文・平安	
31	西中尾	牧布地	山梨市牧布地西中尾	縄文・平安・中世		78	清瀬	牧布地	山梨市牧布地清瀬	縄文・平安	
32	西高	牧布地	山梨市牧布地西高	縄文・平安		79	中久保	牧布地	山梨市牧布地中久保	縄文	
33	中尾	牧布地	山梨市牧布地中尾	縄文・平安・中世		80	中久保	牧布地	山梨市牧布地中久保	縄文	
34	高尾	牧布地	山梨市牧布地高尾	縄文・平安		81	中久保	牧布地	山梨市牧布地中久保	中・近世	
35	高尾	牧布地	山梨市牧布地高尾	縄文・平安		82	南河内遺跡	牧布地	山梨市牧布地南河内	中・近世	
36	眼下	牧布地	山梨市牧布地下眼下	縄文		83	松原	牧布地	山梨市牧布地松原	中世	
37	市地原	牧布地	山梨市牧布地市地原	縄文		84	小田山城址	牧布地	山梨市牧布地小田山	平安・一戸世	
38	市地原	牧布地	山梨市牧布地市地原	縄文・平安		85	小田山城址	牧布地	山梨市牧布地小田山	平安・一戸世	
39	御所	牧布地	山梨市牧布地御所	縄文・平安		86	山田山遺跡	牧布地	山梨市牧布地山田山	縄文・平安	1992年調査
40	山山	牧布地	山梨市牧布地下山山	縄文・平安		87	成沢大蛇	牧布地	山梨市牧布地成沢大蛇	中世	
41	山寺	牧布地	山梨市牧布地山寺	縄文・平安		88	猪之火	牧布地	山梨市牧布地猪之火	中世	
42	御所遺跡	牧布地	山梨市牧布地御所	縄文		89	佐馬遺跡	牧布地	山梨市牧布地佐馬	中世	
43	御所	牧布地	山梨市牧布地御所	縄文		90	御所遺跡	牧布地	山梨市牧布地御所	中世	
44	高地	牧布地	山梨市牧布地高地	縄文・平安		91	山田山遺跡	牧布地	山梨市牧布地山田山	中・近世	2003・土生調査
45	西原	牧布地	山梨市牧布地西原	縄文・平安		92	山田山遺跡	牧布地	山梨市牧布地山田山	中・近世	
46	丸山A	牧布地	山梨市牧布地丸山	縄文		93	上久保	牧布地	山梨市牧布地久保	近世	
47	丸山B	牧布地	山梨市牧布地丸山	縄文		94	ツバケガ屋の遺跡	牧布地	山梨市牧布地ツバケガ屋	近世	
48	二ノ原	牧布地	山梨市牧布地二ノ原	縄文・平安		95	高谷山遺跡	牧布地	山梨市牧布地高谷山	近世	

【参考文献】

- 信藤祐仁 1976 「牧丘町発見の押型文土器」「丘陵」1-2 甲斐丘陵考古学研究会
 小野正文、信藤祐仁 1979 「甲斐の押型文土器」「丘陵」6 甲斐丘陵考古学研究会
 牧丘町教育委員会 1981 「古宿道の上遺跡—西保育園裏面設に伴う敷石住居址等の発掘調査報告書—」
 山梨市教育委員会 2006 「袖口1金桜井社與社址遺跡—山梨市牧丘町袖口地内の山寺寺社跡学術調査報告書—」

小野正文 1980 「先史時代」「牧丘町誌」牧丘町役場

大崎文裕 1992 「畠田遺跡」「山梨考古」42

十斐毅武 1992 「縄文水晶遺跡—山梨県牧丘町奥豊原遺跡・乙木田遺跡の開拓」「日本考古学協会第58回総会研究発表要旨」

日本考古学協会

十斐毅武 1998 「奥豊原遺跡」「山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)」「山梨県」

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査対象としたのは南北 21.5m、東西 10.5m の L 字形を呈した範囲で、面積は 171.8 m²。貯水池の建設範囲とほぼ一致する。

重機による掘削にあたっては山梨市教委によって実施された試掘データをもとに実施し、試掘で近世の土坑を検出したとされる黒色土の遺構確認面まで掘り下げたところ、道幅（北側）では地山面と判断した黄褐色土が切り土のためにごく浅く確認されたのに対し、盛り土造成を受けた南側では相当深く地中にもぐっている状況であった。南側の一部を重機で深掘りした結果、縄文土器片が黑色土下層から出土し、その下部で道幅と同質の黄褐色土が確認されたため、黄褐色土上層の黒色土～褐色土面を遺構確認面と判断した。近世の上層遺構もその面に構築されていることから、近世遺構の調査を行いつつ、厚い縄文時代の包含層を人力で掘り下げるのこととした。実測にあたっては国家座標に基づく基準点測量を実施し、光波測量用の杭を 2か所設置した。

重機による表土剥ぎののち、人力で鋤籠を用いて包含層の掘り下げと遺構確認を行った。その際、黒色土面で確認できた近世以降のピット、土坑状落ち込みについては半裁し、土層・断面観察などを行った後、完掘し、光波測量機とパソコンにて図化を行った。パソコンで用いたソフトはアイシン精機の「遺構くん」で、遺構図化、遺物取り上げに用いた。また全体的な写真測量用データとしてポール撮影およびオルソ画像作成を業者委託し、光波による遺構図化データを捕うとした。遺物は光波測量機で通し番号を付けて取り上げて「遺構くん」でパソコンに取り込み、野帳に作業内容を記録した。遺物の最終番号は 3540 である。

黒色土は深いところで 1 m 近くと厚く、縄文後期の遺物が全体的に出土したため、当初の予定よりも調査には時間を持った。また急傾斜面のため一輪車を用いることがほとんど無理で、箕に入れた廃土を 1 杯ずつ調査区外へ人力で運ばなければならなかつたことから調査は難航することとなり、作業員の方々には御苦労をおかけした。

結果的に敷石住居跡 1 軒に労力を集中し、1 号配石とした敷石状の遺構については住居の一部なのか、配石遺構なのか、明確な結論を得ることができなかった。

第2節 層序

調査区南壁と北壁に沿ってサブトレーンチを入れ、土層を確認、観察した（図 6）。基本的には両者は同じ堆積が認められるが、上層の旧水田面断面に関する堆積状況に違いがある。ここでは南壁のトレーンチ内で確認した土層を基本土層として、遺跡付近の層序について整理する。



図 3 調査地点と周辺 (1/5000)

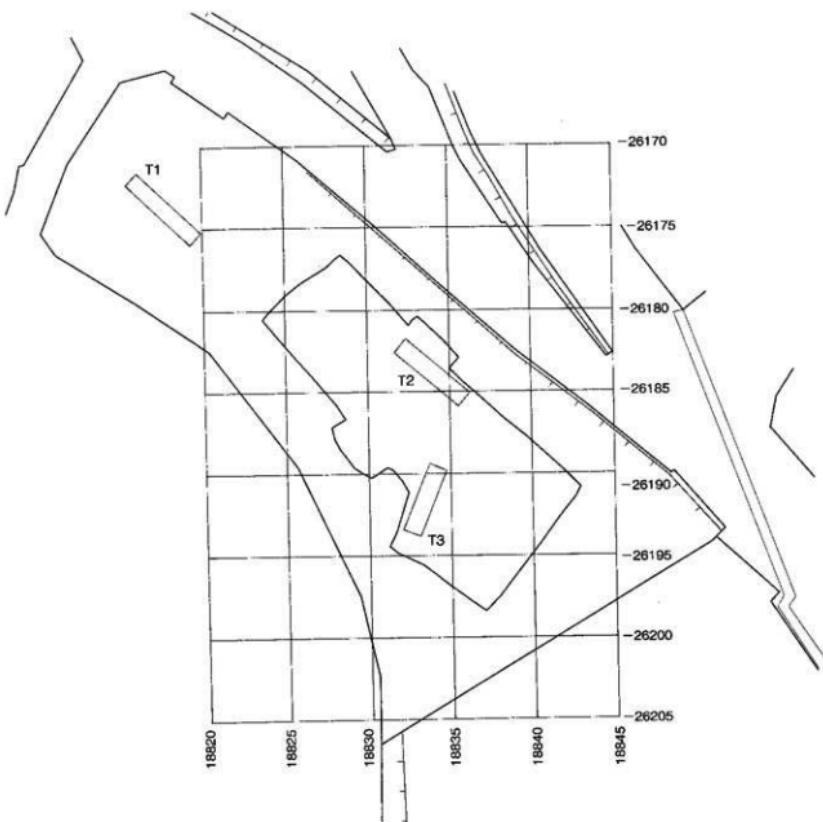


図4 試掘坑配置図及び座標 (1/300)

土層内容は以下の通りである。

- 1層 黒褐色土-表土層（耕作土）。
- 2層 細い黄褐色砂質土-旧水田の床土。
- 3層 暗褐色砂質土-近世以前の原土。
- 4層 黒褐色砂質土-やや黒味のある土。
- 5層 黒色土。
- 6層 細い黄褐色砂質土。
- 7a層 黒褐色砂質土-やや黒味弱い。土器片多い。
- 7b層 黒褐色砂質土-7a層と同質。土器片は皆無。
- 8層 細い黄褐色砂質土。
- 9層 黄褐色砂質土。

第3節 遺構

(1) 1号竪穴(第1~3図)

(概要・立地) 調査区南半の大部分を占める縄文時代後期の大形敷石住居跡。南北向き急斜面に立地す

る。主軸方向は N49°E で出入り口側を南西方向、奥壁側を北東方向に向ける。奥壁側は上層を削土され、南西側は調査区外へと続き、また畠脇に電柱があつて住居の出入り口部を完掘することはできなかつた。

(調査経過) 調査区内の精査によって暗黄褐色土の確認面中に一部谷状の黒色土堆積部分を確認(9月16日)。黒色土が調査区境の壁面にかかる部分にサブトレチを入れたところ、敷石を検出し、敷石住居と判断(9月26日)。その時点では住居の主軸方向が不明であったため、斜面の傾斜方向に出入り口部を想定し、十字ベルトを設定した(10月1日)。ただ住居主軸ラインは結果的にずれてしまった。ベ

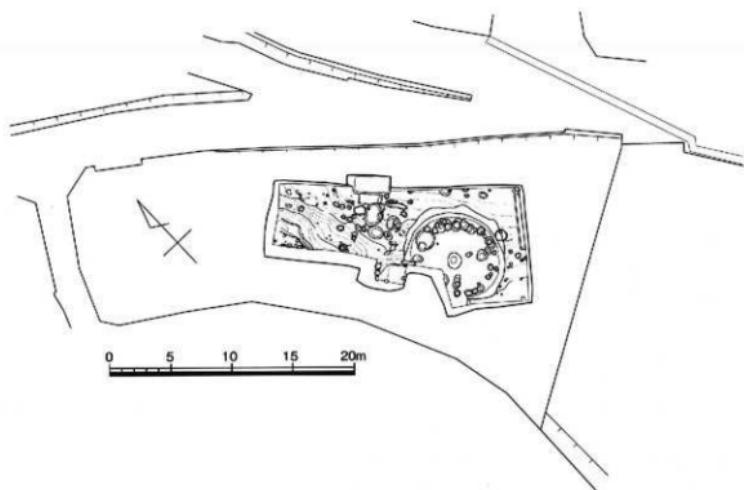
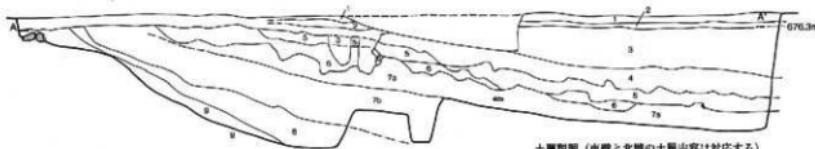


図5 遺跡全体図 (1/300)

南壁セクション



北壁セクション

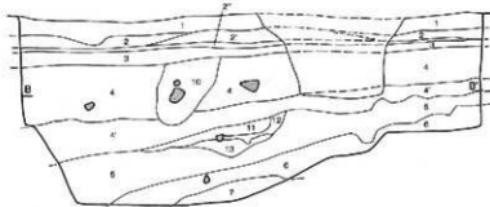


図6 壁面セクション

- 土層説明 (南壁と北壁の土層内容は対応する)
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 水田土。耕作土。
 - 2a 純黒褐色土 (10YR4/3 - 5/6) 水田の底土。ローム質。
 - 2b 黑褐色土。
 - 3 黑褐色土 (10YR2/3) 工事による転動層か。
 - 4 黑褐色土 (10YR4/1) 田地表面か。やや黒味のあら土。3層に類似。砂粒粗多。ローム粒・赤色粒有。
 - 5 黑褐色土 (10YR2/1) 黏性土。砂粒有。炭化物や多。赤色粒有。
 - 6 純黒褐色砂質土 (10YR4/3) 黄褐色ブロック多。砂粒多。赤色粒有。
 - 7a 黑褐色砂質土 (10YR3/2) やや黒味弱い。砂粒粗多。炭化物多。炭化物・土器片有。
 - 7b 黑褐色砂質土 (10YR3/2) 上層とは同質だが、土器なし。ややローム粒多。
 - 8 純黒褐色砂質土 (10YR4/3) 黄褐色ロームブロックや多。砂粒極多。土器なし。
 - 9 黄褐色質土 (10YR4/4) ローム質。砂粒極多。土器なし。
 - 10 純黒褐色砂質土 (10YR4/3) 上層から遡り込んだピット・礫入り。
 - 11 砂・礫 (径2 - 30cm) やや多。1箇所上。
 - 12 黑褐色砂質土 (10YR2/3)
 - 13 砂・礫なし。

ルト、覆土中の大型礫を残して床面と思われる面まで掘り下げるを行い、写真・断面実測をする。ベルトをはずし、壁面らしきところを全体に出したところ、周囲の堆積土とは異なるやや黄味の強い土が住居内

および住居周辺に限定的な広がりを示したため、当初、床面かとも考えたが、敷石上部に堆積していることから上葺き土または周堤帯の崩落土と想定(10月2日)。覆土礫を図化、ポール撮影しながら除去

し、一部ベルトを再設定して堆積状況をみつつ敷石のみを残しながら床面を探す。その過程で壁面を追ったところ、やはり黄褐色土は真の礫ではなく、奥（下層）から遺物を含む暗褐色土が出てきた。そこで奥壁側に5本の部分的なベルトを設定し、床面・礫を追って掘り進んだ。その途中で、礫ぎわから床面よりやや浮上して卯大の円礫が列状にならんで出土し、付近には柱痕の炭化材、焼土、柱穴間を渡すような横位の炭化材および焼土が検出された。また注口上器や土偶が床面上に遺存するように出土した。遺物、礫を実測後取り上げ、床・壁面をほぼ確定し、配石・敷石を残した状態で写真撮影（10月21日）。敷石等をすべて外し、柱穴を探査、完掘した（10月22日）。炉については方形石組を想定して精査したが、風化盤のため、礫の輪郭が明確ではなかった。上層の礫を除き、半裁したところ、円形の掘り方内に炉体土器数個を寄せ集めたように正位埋設した埋甕炉が検出でき、炉体土器直上から発泡粘土（長さ14cm程度）が出土した。敷石は出入り口付近で調査区壁面にかかるものは残し、その他についてはすべて外し、下部ピットを調査した。

（平面・規模）縦穴はやや横長の楕円形主体部と、主軸上出入り口側に付属する張り出し部が連結した柄鏡形敷石住居で、主体部長7.5m（上端間）、交軸長8.28m、張り出し部は主軸長0.8m以上、交軸長1.8m以上で、全体では主軸長8.2m以上（推定9m）である。

（柱穴）主体部壁際に楕円形（あるいは隅丸方形）に配列する。出入り口側、主体部と張り出し部の境（連結部）には主軸線上の敷石両脇に継長の2つの柱穴がある（対ピット）。各柱穴の規模は次の通りである。

〔主体部〕（左回りに） 長軸径cm × 交軸径cm × 深さcm 備考		
53ピ	65×51×68	
45ピ	60×48×65	
44ピ	60×50×68	
73ピ	49×38×39.4	
56ピ	47×44×56.7	
72ピ	63×58×76.7	
71ピ	59×40×12	
70ピ	68×58×86.3	炭化柱痕
52ピ	68×65×40	炭化柱痕
51ピ	35×25×15	
77ピ	60×35×69	
50ピ	70×69×83.1	炭化柱痕
55ピ	118×76×42	
49ピ	100×60×46	
74ピ	95×80×48	
48ピ	57×41×47	炭化柱痕
47ピ	56×48×67	

54ピ	72×68×73.3	
69ピ	82×57×80.7	炭化柱痕
【対ピット】		
75ピ	62×50×61.3	
76ピ	66×56×86.6	
78ピ	98×36×49.1	

上記のほか54号ピットと重複するように土坑状ピットがある（46号ピット）。154×149cm、深さ52cmのタライ状土坑で、住居内貯蔵穴の可能性がある。

柱穴が重複するように存在することから建て替えが想定できる。炭化柱痕が残る48・49・50・52・69号ピットを焼失（廃絶）時の柱穴と考えることができる。また敷石で覆われた72号ピットは柱穴が立つ余地がないことから、建て替えた前の柱穴といえる。したがって新旧の柱穴配置は次のように整理できる（図10）。

【旧住居】47・55・71・74・77ピット

【新住居】44・45・48・49・50・52・53・54・56・69・73ピット

奥壁側でわずかに柱穴1本分程度主軸線をずらし、ほぼ同じような柱穴配置で建て替えたことが考えられ、張り出し部側の柱穴には重複がないことから、奥壁側を中心に建て替えた住居といえる。柱穴間距離は主体部の短いところで1.2～1.4m、長いところで2.5mを測り、対ピット間の長さは1.1m程度である。

主体部の柱穴配置は、基本的には奥壁1本、両側3本ずつで計7本が対称的に配置し、さらにそれの中間に1本ずつ柱穴を配置したので、中間の柱穴は補助的なものかもしれない。そうであれば主柱間隔は約2～2.5m、補助柱穴はその半分の配置となる。

（敷石・円礫）敷石は鉄平石のような角をもつ板状の花崗閃緑岩を中心的に丸みのある板状礫、棒状礫などを用いている。敷石の敷設部分は炉周辺、連結部、張り出し部、右壁寄り（炉に向かって右側壁寄り）、左壁寄りに分布する。また礫を並べた配石は50号ピットと52・74号ピットを結ぶ直線的な配石、69・73号ピット付近のやや乱れた配石、78号ピット上層の対ピットに伴う集石に近い配石がある。

炉の敷石は、小形方形の石團を用いて構成する。炉上面には炉を塞ぐように1.7×1mの範囲で敷設する。炉上面には炉を塞ぐように礫が積み重なっていた。

連結部の敷石は炉と張り出し部を結ぶ廊下状の敷石で2.5×0.5～0.7mである。炉正面には最大級の平石を用い、横位に礫をつないでいる。

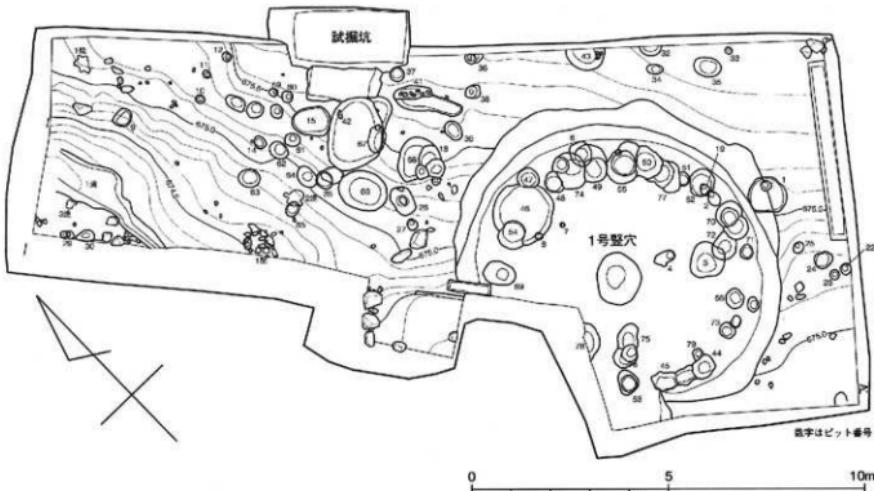


図7 全体図 (1/125)

張り出し部は推定 3×2.3 m の円形に近い敷石で、対ビット付近から外側に向かって、大型棒状礫を縁石としてハの字状に配置している。調査区外に隠れているため全貌は不明であるが、おそらく楕円形に縁石で張り出し部を囲む構造であろう。

右壁寄り敷石は 70 号ビットと 73 号ビットをつなぐように長さ 3.4 m にわたり帯状に敷設するもので、下部構造の柱穴と重複する。73・56 号ビット上部では柱穴の内側半分にかかるように敷石が重なることから、柱あるいは柱と柱を結ぶ壁構造に接するよう敷石を敷設したものと考えられる。敷石の周辺には円礫が隙間を埋めるように出土した。

左壁寄り敷石は 54・69 号ビット間に長さ 0.8 m の範囲で部分的にある。柱穴に部分的に重なるもので、柱穴の外側にかかるように平石を 2 枚置き、やはり円礫を周辺に配している。

奥壁側の円礫列（列石）は向かって左側の 55・49 号ビット上では柱穴の中心からやや外側に位置し、14 個程度の円～楕円礫を 12 m の長さで直線的に並べる。向かって右側の 50・70 号ビット間では左側ほど明確ではないが、断続的に 4～5 個の円礫列が約 2.2 m 直線的に並んでいる。個々の礫の大きさは径長軸長 4～8 cm のものが多く、敷石面より約 20 cm 浮上する。列石が後世の構築ではなく住居内施設に伴うものであることが確かであり、火災によ

る焼失で廃棄されたことを考慮すると、生活時の屋内構造をとどめていると考えられる。したがって壁際が床面よりも高くなっていたことを意味し、柱穴間を結ぶ線を境に居住空間と壁際空間があつて、列石が境界を示す何らかの役目を果たしていたことがわかる。おそらく壁ぎわの立ち上がり部分に並べられたものであろう。

（炉）一辺 50～60 cm の方形石開いの周辺に 1.7×1 m の範囲で敷石をもつ（図8）。炉の掘り方自体は 1.3×1.15 m、深さ 34 cm の楕円形で、ボール状の断面形である。石開いの中心は掘り方の中心から奥壁側にわずかにずれているが、炉周辺に敷設された敷石の範囲はおおよそ掘り方内に収まっている。石開いの中には土器下半部や底部を用いた炉体土器 3 個（あるいは 4 個）が重複するように出土した。第 6 図 1～3 がそれで、外面には底部付近に灰が付着し、縁に近い部分は高温のため変色していた。また土器の真下には青灰色の粘質土が径 22×18 cm の円形に残り、被熱面に粘土を円形に貼って炉体土器を固定していたことがわかる。掘り方面は真赤に被熱し、炉体土器直下の粘土の下も全面的に焼化が見られた。

炉体土器の直上、炉の覆土中には、炉体土器の縁から約 2 cm 浮上した位置に三角形で平たい発泡粘土が平らに遺存していた。さらに大型の礫が炉中央を

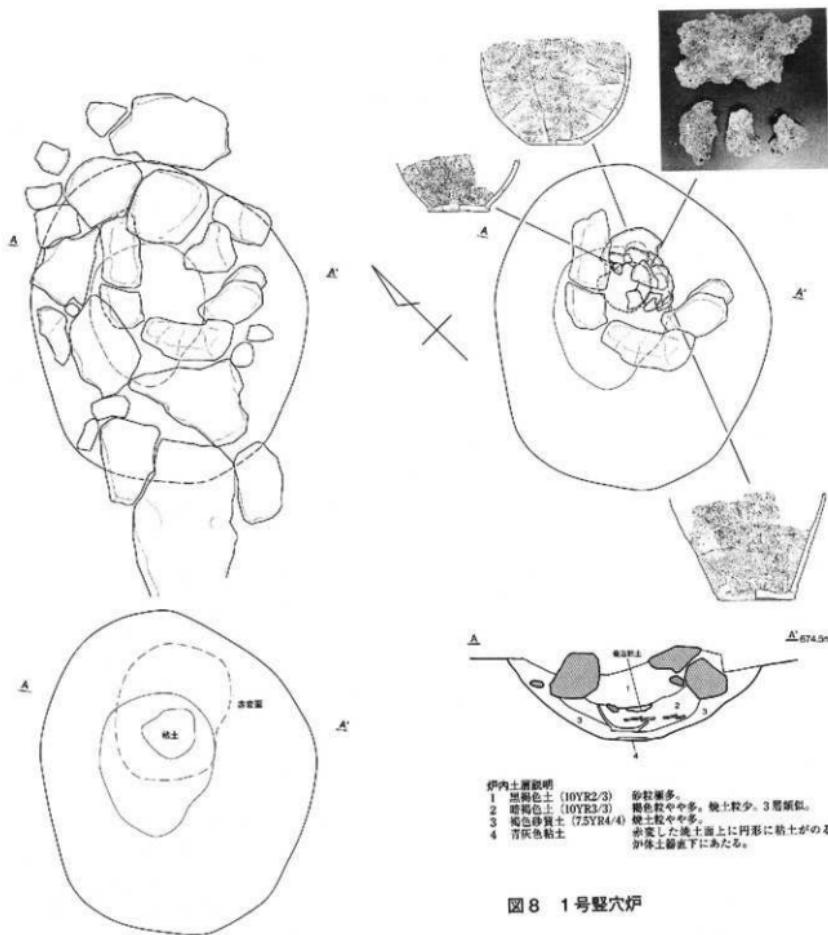


図 8 1号竪穴炉

覆い、さらに複数の礫が乗り、まるで礫で炉を封鎖したかのような検出状況であった。

炉内覆土中、敷石下層には焼骨が多数混入していた。おそらく旧住居で盛んに炉を用いたのち、新住居の炉を再構築する際に掘り方を一部埋め土したものであろう。炉体土器はすべて新住居段階で順次設置されたと考えられ、設置の際に土器を平らに固定するため粘土上で調節したものと思われる。発泡粘土の形成過程に関してはよくわからないが、屋外から自然状態の発泡粘土を拾ってきて炉内に廃棄したという考え方、炉内が高温化して生じたとする2

通りの見方ができる。竪穴内にはほかに強い被熱のため発泡しつつある土器片数片、焼成粘土塊が多数出土し、焼骨が散在すること、火災住居であることから、屋内で生成した物体と考えておく。土葺きなど高気密の屋内で火災が発生し、穴窓状態となって異常高温が発生し、とくに炉内が高温化した可能性もある。ただしその場合、炉内焼骨については説明できない。

発泡粘土、発泡土器の存在は縄文後期に各地で注意されていて、敷石住居に焼骨が多く出土することと合わせて、火を用いて何かの儀礼行為を行ってい

た可能性もある。

(覆土・礫) 覆土中には多くの礫が出土した。奥壁近くのものは一部周堤礫として人為的に並べたような形跡があったが、それらはいずれも壁面よりも内側、柱穴列より外側に位置し、壁面に積み上げたものが内側に崩れたような状況であった。縦穴内部の礫は、多くが柱穴列よりも内側で柱穴に近い場所から出土している。土葺きであったとすると上屋の土留め等に用いた壁面の礫、あるいは周堤礫が内部に落ち込んだものと考えられる。

(遺物出土状況) 上器は5層の黒褐色砂質土中と、黄褐色砂質土の間層をはさんで7層から出土した。

床面遺物としては注口土器、土偶、敷石にともなう円礫、磨り石ほかの石器類がある。

第7図12の注口土器は住居右側空間の壁寄り、右壁寄り敷石近くから正位で床面上に遺存するように出土し、注口部分を除き完存するものであった。また第12図100の土偶も注口土器の近く、柱穴よりも外側空間により壁に近い位置からの出土である。また右壁寄り敷石脇に細長い打斧状の棒状石器があり、石棒的な扱いを受けた祭祀的な石器と考えておく。第13図101の土偶はやはり右空間、張り出し部に近い位置で出土した。その他、性格不明の棒状土製品(102)、ミニチュア土器(104)も右手前空間から出土し、右手前空間は祭祀性が濃い。また磨き石、土錘、石錘も右手前空間からの出土で、磨き石が土器の研磨礫、土錘・石錘が編み物の錘であるならば、女性的空間ともいえる。注口土器を非常日常的な土器と考えると、非常日常的、祭祀的、女性的遺物が右側手前空間に集中する。

(床面) 敷石面は居住時の床面で、そのレベルに本床面があったと考えられるが、敷石のない土間の部分では明確な硬化面がない。焼土面が火災のための被熱面とすればその面が床であったといえるが、焼土面に際立った硬化面はなかった。掘り方面も明確ではないが、壁際で柱穴プランを確認できた面が掘り方面と考えられ、敷石上面よりは約10cm下がっている。

(壁) 奥壁側では壁の上端から柱穴確認面まで約1.06mの高さがあり、敷石住居の壁としては非常に深い。急斜面に広い面積を確保するために削平した結果、奥壁側で高い壁となったものである。張り出し部付近では浅く、壁検出は難しく、壁は不明確であった。

奥壁には壁よりも内側、壁から浮いた状態で部分的に石積み状の構造が認められた。周堤礫と呼ばれ

るもので、壁面の土留めのための石積みであろう。その他、柱穴ラインより外側には多数の礫が重なり、周堤礫が縦穴内に崩落したような状況をみせている。

(火災の状況) 火災を示す状況証拠として以下の5点を整理しておく。

(1) 焼土 奥壁寄りでは柱穴よりも内側の床面が広範囲に赤く被熱していた。また円礫列と同レベルから柱穴を結ぶような焼土塊が横位の炭化材とともに検出された。

(2) 炭化物 カヤ状の敷物的な炭化物が奥壁左側柱穴付近で出土した(図版5右下)。あるいは屋根の葺き材かもしれない。その他、壁よりを中心にして炭化物が散見されたが、床面に放射状に炭化材が出土するような火災住居に特有の出土状況は示していない。

(3) 炭化材 いくつかの柱穴では柱の根元が炭化した柱痕が遺存した。検出レベルは敷石面とほぼ同じで、高さ10cm、径22cm程度である。

(4) 焼骨 右側空間を中心に床面あるいは掘り方面から白色の焼骨が何か所かでまとまって出土した(第5図下)。いずれも粉状~1cm程度の骨片で、同定は難しい。炉覆土中からも細かな骨片が集中的に出土した。焼骨の出土については、各地の縄文後期の敷石住居から出土する事例が報告されている。同定分析が可能な骨資料がないため、分析は実施していないが、各地の事例では獸骨が多い。火災に伴う生成のほか、火を用いた祭祀行為による掘り方面へ



図9 磕と住居プラン

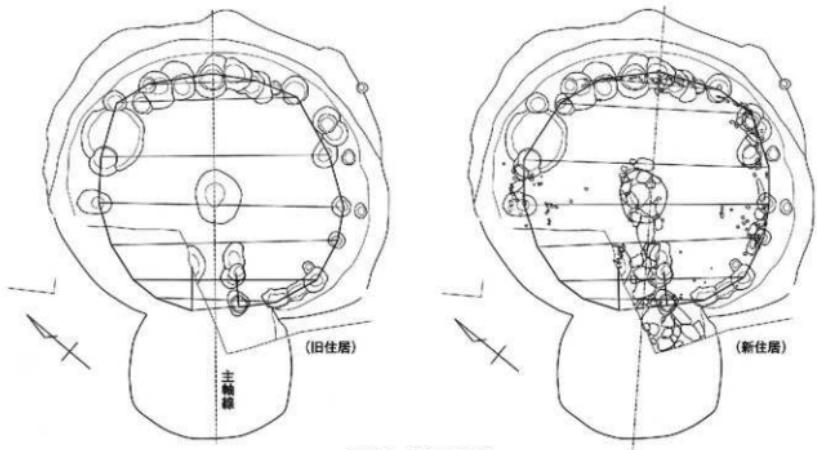


図 10 柱穴の変化

の散布・埋納行為が考えられる。

(5) 発泡粘土・土器 炉内から大形発泡粘土が出土したほか、強く被熱、部分的に発泡した土器片が数片出土した。室内、炉内での火災に伴う異常高温によって発泡した可能性がある。炉内出土の発泡粘土はおそらく 1000 度以上の高温を受けたと考えられるもので、炉内の被熱、あるいは埋没過程での混入、意図的な埋納などが考えられるが、いずれにしても通常の火災でここまで変形するか、というような印象を与える。

【註】

1) 村木周三氏に依頼して国立歴史民俗博物館で見ていただいたところ、肉眼観察によれば一部は針葉樹ではないか、という見解であった。

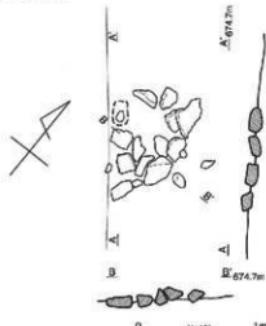


図 11 1号配石

(2) 1号配石 (図 11)

調査区中央、西壁にかかるようにして検出された配石で、当初、敷石住居の一部かと考え、2号竪穴として住居番号を付けた。0.8 × 0.9m の配石で、敷石周囲に縁石を配したような形態で、石の大きさは 20 ~ 30 cm 程度と全体に小ぶりである。石を除去して下部を精査したが、周辺からは柱穴状の構造はない。何らかの縄文後期の配石としておく。

(3) 1号溝 (図 7)

長さ 3.8m、幅 32 ~ 102cm の溝で、ほぼ直線的に北から南へ流下する。断面は北壁セクションにあるとおりで、5 層に掘り込まれている。平安かと思われる土器片が出土している。

(4) ピット群

以下にデータを記す。

	最大径 cm	交輪径 cm	深さ cm	土色	断面形	記
1ビ	100	88	15	暗褐色砂質	皿状	
2ビ	44	29	33	暗褐色砂質	ピット状	
3ビ	90	85	12	暗褐色砂質	皿状	
4ビ	55	28	22	暗褐色砂質	ピット状	
5ビ	15	14	10	暗褐色砂質	小ピット状	1号上層
6ビ	63	53	25	暗褐色砂質	ピット状	1号上層
7ビ	11	10	15	褐色砂質	小ピット状	1号上層
8ビ	22	18	2	暗褐色砂質	皿状	1号上層
9ビ	49	43	10	暗褐色砂質	皿状	
10ビ	24	20	5	暗褐色砂質	皿状	
11ビ	22	17	3	暗褐色砂質	皿状	
12ビ	25	20	6	暗褐色砂質	皿状	
14ビ	33	26	6	暗褐色砂質	皿状	
15ビ	96	75	10	褐色砂質	土器片	
18ビ	50	45	12	暗褐色砂質		

20ビ	22×20×14		
21ビ	32×16×2	浅い壺状	褐色砂質
22ビ	26×23×9	黒色砂質	
23ビ	25×23×11	褐色砂質	
24ビ	46×41×8	黒色砂質	
25ビ	30×26×10	黒色砂質	
26ビ	76×51×52	暗褐色砂質	
27ビ	29×25×30	暗褐色砂質	
28ビ	46×40×17	暗褐色砂質	
29ビ	24×17×8	暗褐色砂質	
30ビ	46×26×10	暗褐色砂質	
32ビ	56×24×6	暗褐色砂質	ピット状
33ビ	18×16×5	暗褐色砂質	小ピット状 木枕出土 現代か
34ビ	41×25×8	暗褐色砂質	ピット状
35ビ	69×48×10	暗褐色砂質	ピット状 黒曜石片
36ビ	45×26×26	灰黄褐色砂質	現代か
37ビ	36×36×6	黄褐色砂質	
38ビ	38×32×30	灰黄褐色	現代か
39ビ	53×39×9	暗褐色砂質	
41ビ	98×35×29	黄褐色砂質	津状
42ビ	191×138×17	暗褐色砂質	土器片
43ビ	98×53×45	暗褐色砂質	
56ビ	54×34×20	黑褐色砂質	
57ビ	44×41×18	暗褐色砂質	土器片
58ビ	36×29×16	暗褐色砂質	
59ビ	22×20×13	黑褐色砂質	
60ビ	29×28×20	暗褐色砂質	
61ビ	38×34×14	暗褐色砂質	
62ビ	50×41×22	暗褐色砂質	
63ビ	55×48×25	暗褐色砂質	
64ビ	57×42×35	暗褐色砂質	
65ビ	39×32×38	黑褐色砂質	
66ビ	126×96×27	黑褐色砂質	土器片
68ビ	113×103×13	暗褐色砂質	

(5) 焼土ブロック (図7)

調査区北端側で遺構外より3箇所の焼土ブロックが検出されている(1~3焼)。いずれも不整形で半截して断面観察したところ、いずれも掘り込みはなく、平面的な焼土の堆積状況であった。確認面は図6下5層上面で、近世以降のピット群に連関するものであろう。各焼土ブロックの大きさは次の通り。

- 1焼 52cm×37cm
- 2焼 46cm×43cm
- 3焼 27cm×22cm

第4節 遺物

(1) 1号竪穴の遺物

(土器) 1~6は1号竪穴炉内出土。うち1・2は炉体土器でともに正位で出土した。2が炉中央に位置し、1は2以前の炉体土器で、2の上部に発泡粘土がのる。1は網代痕をもつ深鉢形土器で、縁部には内面に粘土、外面には灰が付着する。胎土にはデイサイトが多く、花崗岩が多い在地の胎土とは異質である。2は粗製深鉢で、内外面は被熱によって変

色し、底部には灰が付着する。3は表面が大きく剥離した網代痕底部で、灰が付着することから本来炉体土器と思われるが、出土位置は1の脇で破片状態での出土である。4は網代痕をもつ精製土器底部。5は小突起をもつ深鉢で、炉内を中心に出土した。6も炉内出土で、全体に被熱する。7は口縁部内面に沈線文をもつ無文口縁部の深鉢で、胴部には沈線文間に繩文を施す。住居東壁寄りの覆土中位から出土した。8は小型精製深鉢で、炉南東、覆土中位から出土。内面にオカゲ付着。9は粗製鉢形土器で、口縁部の一部が片口状をなす。10~14は注口土器。10は破片。11は下半が完存し、東壁の覆土中位から出土した。12は南東壁寄り、床面出土で、注口部のみを欠損する。底部は網代痕、外面は無文で磨き、ナデ良好で、外面に黒斑をもつ。13は注口土器の釣手部かと思われる弧状の破片。14は注口部で、12の注口にちょうどいい大きさであるが、別個体であった。15~30は深鉢で、15・18・27は口縁部に文様帯をもつ深鉢、16・17は口縁部無文、胴部文様帯をもつ土器、19~26は沈線文をもつ深鉢で、20・21・23~26は口縁部に1条の沈線文をもち、19・22にはない。28~30は頸部に刻みをもつ隆線文を1~2条もち、口縁部は無文、胴部文様帯となる。33は注口土器底部かと思われる鉢状の底部。34~36は無文土器で、34・35は頸部のくびれがなく、表面の調整が丁寧なのに対し、36はくびれがあり、胴部上半は斜位、下半は横位の荒いナデ痕をそのまま残す粗製土器である。北壁近くからの出土。40~99は破片資料で、うち40~45はピット中からの出土。93~97は瓢形土器で、同一の可能性が高い。ミガキが良好で、微隆起線文をもつ。96は把手状の破片。98は中期、井戸尻式期の渦巻状文様部分で、後期の住居内に持ち込まれた破片。文様部分のみを残して打ち欠き、土製円板状に仕上げようとした可能性がある。

(土製品) 100~101は土偶、103~105はミニチュア土器、107は土錘、108~118は焼成粘土塊。100は頭・左腕・両脚を欠く土偶。胸、腰帶も剥離する。胴部は胴長で、正面に正中線、背面に渦巻文沈線をもつ。腕は斜め上向きに長く伸び、湾曲しながら下がる。胴部が南壁寄りの床面上から出土し、腕が接合する。101も100とほぼ同形の胴部をもつ無脚の土偶で、上半身を欠損する。腰帶に刻みをもち、正面にヘソと思われる刺突およびそれに連絡した正中線、背面に渦巻文をもつ。100に比べて黒色が強く、板状であ

る。102は土錐状の土製品で、円柱形の側面に刺突文を充填し、1本のみ沈線文を施文する。両端部平坦面にも刺突を加え、やや深く棒状工具を突き刺しているが、貫通はしていない。103は小形土器（ミニチュア土器）で、内外面に黒色の漆状付着物が認められる。104は完存するミニチュア土器。外面整形は粗い。105は薄い皿状のミニチュア土器。106は外面中央に未貫通の穿孔をもつ土器片で、割れ口は磨り面となり、全体で四角い形状をなす。107も土器片利用の土錐で、梢円形の端部に抉りを入れて土錐形に仕上げている。

焼成粘土塊は計53点出土し、図示したものはそのうちの11点で、ほぼ大きい順に図示した。出土位置では炉北側に集中する傾向があるほか、南側壁寄りに点在し、いずれも床面近くからの出土である。著しい発泡例は未団化資料に2点あり、その他は通常の焼成による。いずれも手で団子状または扁平にしたもので、何らかの形を意図的に作出したものではない。1軒の住居からの出土量としては多い点数である。なお、未団化資料42点の長軸長データを示すと、1.0~1.9cm-7点、2.0~2.9cm-17点、3.0~3.9cm-13点、4.0~4.9cm-5点で、2cm台の資料が多い。未団化資料の総重量は386gで、団化資料を合わせると1000gである。

(石器) 119~128は打斧、129は石棒状、130は磨斧、131・132は石錐、133・134は磨き石、135は自然円礫、136・137は石棒、138~140は石錐、141は石匙、142~156は凹石、157~172は磨り石、173~175は石英自然円礫、176は砥石、177・178は石皿、179~181は台石、182は磨り面をもつ石材。

119・120は分銅形石斧で122もその可能性がある。119は刃部にススが付着する。120は三角形の刃先で、使用による磨滅痕が著

しい。121・123~128は短筒状打斧。129は打斧状であるが、断面が厚く、細身の石棒を思わせるもので、打斧とは異なるものであろう。130は完存する磨斧。131・132は扁平円礫を用いた打ち欠き石錐で、南東壁寄りからの出土。133・134は磨き石で、全面に細かな擦痕をもつ。133は対ビット（78号ビット）中からの出土である。土器内部の研磨用石器か。ともに長軸方向に対して直交方向の擦痕をもつ点が特徴的である。135も同形、類似質の自然円礫であるが、擦痕が全く認められない。136は石棒端部片で、中期のものに比べると細い。137は細身の

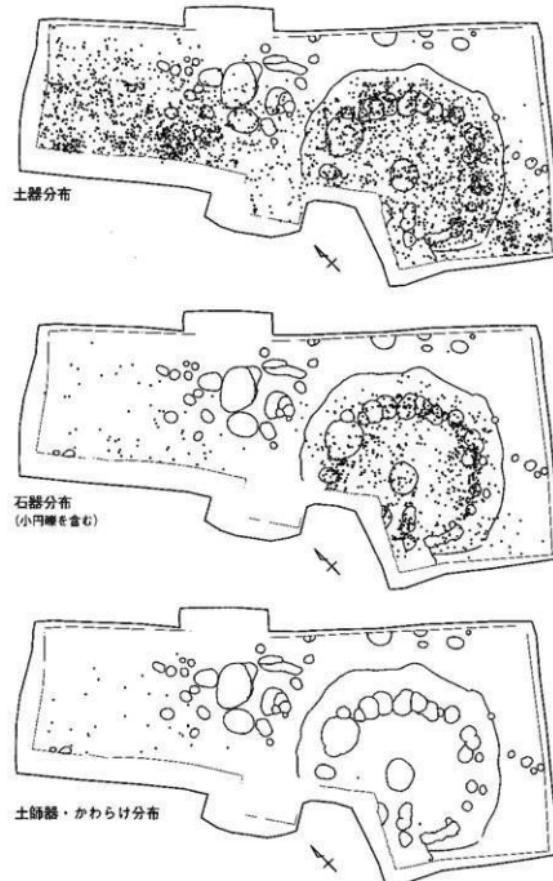


図12 遺物分布図 (1/200)

表 2 土器觀察表

(アーティスト名)、音 - 音楽性、色 - 色調、高 - 高度、重 - 重複、角 - 角度有、曲 - 曲名(略)

表 3 石器觀察表

① 地点	N _{o.}	分類	長/幅/厚/cm	g	石材	色調	注記	備考
14. 横	119	分割形打斧	13.5/7.6/2.9	307	ホルンフェルス	暗褐色	3530	墨
14. 横	120	分割形打斧	15.2/9.8/3.0	205	粘板岩	灰青	597	刀劍尖形、斬耗
14. 横	121	打斧	9.8/7.3/3.0	234	ホルンフェルス	暗褐色	2086	
14. 横	122	石斧?	11.4/8.7/0.8	97	粘板岩	青青	2221	分割形か
14. 横	123	打斧	16.8/10.2/0.8	196	粘板岩	青綠地	2119	
14. 横	124	斧	9.7/5.1/0.8	38	粘板岩	淡灰青	2161 - 2180	刀劍中耗
14. 横	125	打斧	10.5/6.6/1.1	110	ホルンフェルス	淡白	1971	短形
14. 横	126	打斧	12.0/4.8/1.0	75	粘板岩	青青	2023	短形
14. 横	127	打斧	8.2/4.5/1.1	46	粘板岩	暗青	2285	
14. 横	128	打斧	8.7/4.3/0.8	27	粘板岩	淡青	1680	短形
14. 横	129	打斧状	16.5/3.8/2.1	164	ホルンフェルス	灰黑	2718	
14. 横	130	磨擦石	10.3/5.3/2.2	214	閃长岩	淡绿	3140	定角式、充存
14. 横	131	石鍬	6.1/5.4/1.8	70	ダイサイト	灰绿	846	打ち欠き
14. 横	132	石鍬	5.7/4.2/1.9	62	ダイサイト	灰	3118	
14. 横	133	磨擦石	5.0/4.1/1.6	41	蛇紋岩	灰白	78ビ3631	磨擦石、特に側面
14. 横	134	磨擦石	5.5/3.7/2.4	85	蛇紋岩	暗青	3107	全体に擦摩磨耗、特に側面など
14. 横	135	円錐	5.5/4.4/2.9	100	チャート	黑黑	3691	無風なし、自然凹溝
14. 横	136	右鍬	6.2/5.6/3.5	279	鷹巣山岩	灰	1300	
14. 横	137	右鍬	7.7/2.5/2.4	62	片岩	褐灰	3329	肉邊欠損
14. 横	138	石鍬	2.36/1.44/0.46	0.77	墨岩石	墨	2978	
14. 横	139	右鍬	2.00/1.51/0.36	1.03	墨岩石	半透明	2182	
14. 横	140	石鍬	2.70/2.11/0.53	1.69	墨岩石	不透明墨	2154	石標木製品
14. 横	141	石鍬	4.8/4.3/1.0	18	走葉豆岩	綠地	50ビ3628	
15. 横	142	圓石	11.8/7.8/4.3	500	花崗閃雲岩	灰褐	2067	凹み2面
15. 横	143	圓石	11.0/6.9/3.6	404	ダイサイト	淡灰	1482	前面に凹み
15. 横	144	圓石	10.6/7.0/5.3	468	花崗閃雲岩	暗灰	1811	凹み1面
15. 横	145	圓石	13.9/7.3/4.7	604	花崗閃雲岩	暗灰綠	3435	1面のみ凹み
15. 横	146	圓石	12.7/6.9/5.0	736	花崗閃雲岩	暗灰黑	3191	前面に凹み
15. 横	147	圓石	11.4/9.0/5.3	764	角閃石玄武岩	灰褐	2558	炉、西南にわずかな凹み、裏面は彌り凹
15. 横	148	圓石	11.3/7.7/5.4	630	ダイサイト	黑~灰褐	2739	磨り面2、片面に凹み、薄熱、スス付有
15. 横	149	圓石	10.8/8.5/5.3	720	ダイサイト	灰褐	1819	凹み面1、彌り面2
15. 横	150	圓石	10.9/7.2/5.3	405	ダイサイト	琥珀	50ビ3376	凹み面2
15. 横	151	圓石	7.5/6.9/5.2	340	ダイサイト	灰褐	1815	背面に凹み
15. 横	152	圓石	9.2/6.5/5.3	409	ダイサイト	黄水晶	2189	凹み面1
15. 横	153	磨り石	10.3/8.7/6.7	908	片岩	灰黑	2008	わざかに凹み、彌り凹2
16. 横	154	磨り石	10.5/7.7/4.3	482	花崗閃雲岩	灰褐	2902	被熱、スス付有、彌り面1
16. 横	155	磨り石	10.5/7.3/4.1	556	花崗閃雲岩	灰褐	1982	花崗川土、片面にわずかな凹み
16. 横	156	磨り石	11.6/11.3/6.8	1022	ダイサイト	灰青	3392	片面にくぼみ
16. 横	157	磨り石	9.9/9.8/4.3	836	鷹巣山岩	灰褐	1296	台状
16. 横	158	磨り石	10.9/6.2/5.3	512	安山岩	成核	3169	被熱、ヒゲ削れ、スス付有、彌り凹3
16. 横	159	磨り石	12.7/9.6/7.5	1269	花崗閃雲岩	黑灰	1957	被熱、彌り凹2
16. 横	160	磨り石	9.5/7.5/4.4	364	花崗閃雲岩	成核	1295	磨り面1、片面欠損
16. 横	161	磨り石	10.1/8.8/6.3	852	花崗岩簇	灰褐	3488	磨り面2
16. 横	162	磨り石	8.0/5.6/1.7	281	花崗岩簇	灰褐	3395	磨り面1
16. 横	163	磨り石	8.6/6.1/4.3	314	花崗岩簇	成核	3166	磨り面2
16. 横	164	磨り石	9.1/8.0/5.6	552	ダイサイト	黃南	3316	磨り面2
16. 横	165	磨り石	9.3/8.4/4.1	433	安山岩	成核	1298	磨り面2
17. 横	166	磨り石	10.6/8.5/6.5	816	石英岩	灰褐	3398	磨り面2
17. 横	167	磨り石	13.2/6.9/4.8	618	安山岩	重晶角	2963	磨り面2
17. 横	168	磨り石	11.9/7.3/3.3	520	花崗閃雲岩	灰	3144	磨り面1、測量顕着
17. 横	169	磨り石	9.5/5.5/4.1	292	安山岩	灰	3296	磨り面1
17. 横	170	磨り石	8.3/6.4/4.5	367	閃長岩	成核	3412	磨り面1
17. 横	171	磨り石	8.9/7.6/6.0	582	安山岩	成核	3032	磨り面2
17. 横	172	磨り石	9.7/5.3/4.8	220	安山岩	灰	3358	磨り面2
17. 横	173	石英岩	7.5/5.2/3.9	211	石英岩	白	2851	自然縫、被板なし
17. 横	174	石英岩	4.1/3.1/2.0	31	石英岩	白	2619	自然縫、被板なし
17. 横	175	石英岩	4.0/3.0/2.4	43	石英岩	白	1479	自然縫、被板なし
17. 横	176	石英岩	9.3/10.0/0.8	64	砂岩	白	2197	表面摩擦
17. 横	177	石英岩	13.0/17.3/6.0	1690	砂岩	白	3214	磨り面1
17. 横	178	石英岩	12.8/13.2/4.6	822	砂岩	灰褐	2572	
19. 横	179	台石	16.5/14.9/4.3	1099	花崗閃雲岩	灰青	3215	被板顕著
18. 横	180	台石	18.5/14.5/4.8	1940	花崗閃雲岩	灰褐	74ビ	磨り面2
18. 横	181	台石	14.6/11.1/3.2	742	花崗岩	成核	3235	磨り面1、重複
18. 横	182	台石	27.0/13.0/5.4	2200	標高火成岩凝灰岩	暗灰黑	70ビ	新古全體に壓純
18. 横	183	右鍬	2.10/1.54/0.41	0.82	標高石	神	2型1563	
21. 横外	144	分割形打斧	17.0/9.5/2.8	588	粘板岩	神	1315	万邦わざかに彌耗。衝縫玉漬し
21. 横外	145	打斧	14.2/6.5/2.0	157	粘板岩	褐灰	1314	
21. 横外	146	打斧	10.2/3.8/0.9	40	粘板岩	青灰	1939	
21. 横外	147	打斧	7.9/4.7/0.9	36	石英岩	灰白	1420	
21. 横外	148	打斧	5.6/3.9/1.3	32	粘板岩	青灰	63ビ	
21. 横外	149	横刃形右鍬	9.0/13.7/2.7	316	粘板岩	灰	2888	
21. 横外	150	磨り石	5.5/5.5/6.8	662	ダイサイト	灰褐	757	磨り面3、わざかに凹み1
21. 横外	151	磨り石	8.5/8.6/6.7	776	安山岩	磨り面2	3223	
21. 横外	152	磨り石	9.5/9.3/9.0	479	安山岩	磨り面2	2723	
21. 横外	153	磨り石	8.4/8.2/2.6	83	安山岩	磨り面	3074	自然縫、被板なし
21. 横外	154	磨り石	4.7/3.2/3.3	73	石英岩	成核	1925	自然縫、被板なし
21. 横外	155	磨り石	2.7/2.4/1.3	12	石英岩	灰白	1316	自然縫、被板なし

表 4 土製品観察表

図 号	地 点	法 式	形 状	長/幅/mm	整形技術	表面 外/内	断面(八字～口盤)		底面 外/内	底面 寸 法	説明	参考
							上部	下部				
12	142	100 平底	深窓	5.5/10.0/2.5	手打・鉛錠・粘土	斜面	B.	平・多・角・空	B	38	2477・3622	腰帶、施瓦ー筋に河原、質瓦に施墨火
13	143	101 上底	深窓	7.9/3.8/2.0	手打・鉛錠・丸 窓・組み入	斜面～馬蹄	B.	平・多・直・斜・内・外	A	44	2699	細なし、有田に施作式、馬蹄形
12	144	102 神祇工石盆	柱頭	6.6/6.2/2.3	手打・鉛錠・	斜面	B.	長・空	B	39	2700	土器型引合式、質多し、全体無火
13	145	103 ティアラ	回頭	4.1/4.5/2.7	手打・手作	斜面～馬蹄	C.	長・短	D	74	2540・3136	内側面施墨引合
13	146	104 ミニティア	回頭	5.6/5.2/2.4	手打・手作	斜面	D.	長・中・短	A	22	3583	浅火、外側面無墨
13	147	106 上底	柱頭	4.0/4.0/0.6	手打・	斜面	D.	長・直	H	7	1960	
13	148	106 上底片	柱頭	4.0/4.0/0.9	手打・	斜面	D.	長・直・短	C	25	1244	山形切妻中央に突起孔、斜面は單純化
13	149	107 土器形	回頭	1.0/2.0/0.5	手打・	斜面	D.	直・多・直・斜・内	S	16	2604	斜面に付いた加工
13	150	108 土器形	回頭	2.2/2.5/0.5	手打・	斜面	D.	直・多・直・斜	B	45	2015	
13	151	109 鉢形	回頭	6.4/5.5/0.9	手打・	斜面～腰帶	A.	直・中・直	C	29	3539	
13	152	110 鉢形	回頭	6.1/7.1/1.6	手打・	斜面～腰帶	A.	直・中・直	B	100	2107	
13	153	111 鉢形	回頭	5.2/5.4/1.5	手打・	斜面～腰帶	C.	長・直・中・短	A	91	2116	
13	154	112 鉢形	回頭	5.1/5.2/1.5	手打・	斜面	A.	直・腰帶・短・中	C	26	2163	
13	155	113 鉢形	回頭	5.2/5.4/2.0	手打・	斜面	A.	直・中・直・中	C	56	1952	
13	156	114 鉢形	回頭	5.2/5.4/2.0	手打・	斜面	A.	直・中・直	D	25	2349	
13	157	115 鉢形	回頭	4.3/4.3/1.9	手打・	斜面	B.	直・中・直	D	26	2305	
13	158	116 鉢形	回頭	5.1/5.2/2.3	手打・	斜面	C.	直・中・直	C	24	3266	
13	159	117 鉢形	回頭	5.1/5.2/2.6	手打・	斜面	A.	直・中・直	A	29	3468	東京
13	160	118 鉢形	回頭	5.2/5.1/1.7	手打・	斜面	C.	直・中・直	D	31	2609	土体に施墨
13	161	119 鉢形片	回頭	5.2/5.2/2.0	手打・	斜面	D.	直・中・直	B	3	18	山形穿孔による棒状の穴
13	162	120 鉢形片	回頭	5.2/5.1/0.5	手打・	斜面	D.	直・中・直				

石棒で、両端は欠損する。138~140は黒曜石製石鎚で、いずれも脚の一部を欠く。140は未製品か。141は端部を欠損した石匙で、50号ピット中からの出土である。142~156は凹石で、楕円形の自然円礫を用いたものが多いほか、151・153は円形の円礫、155は長方形の自然礫を用い、上下面を磨り面とした例が多く、側面を平坦に敲打して石鹼状に加工したもの、側面を磨り面としたものはほとんどないのが特徴的である。この中で152は片面にのみ円形凹みと溝状凹みが付けられ、通常の凹石とは異なっている。何らかの文様のように見える。154~156の凹みは非常に浅く、磨り石として分類したほうが良いかもしれない。157~172は磨り石で、157・159はやや大型礫であるが、それ以外は凹み石とほぼ同形かやや小型の自然円礫を用い、上下両面を磨り面として用いている。これらの中には磨り面が不明確なものも多く、覆土中出土の自然円礫と区別が難しい。173~175は半透明の石英円礫で、石器ではないが搬入標として河原から持ち込まれた礫である。他の円礫と同じような意味合いで搬入されたのかどうかわからぬが、河原でこうした礫を探すのは難しいのではないかろうか。176は砾石と思われる石器で、表面が薄く剥離したもの。177・178は石皿で、いずれも半分ほど欠損する。扁平自然礫を用い、上面がごく浅く窪む。周囲の整形は全く行われていない。179・180も扁平な自然礫で、使用痕は不鮮明であるが台石としての使用が考えられる。182は70号ピット出土の石材で、床面敷石と同質の鉄平石状の石材である。平坦面の摩耗が顯著で、砥石的に用いた可

能性が高い。

(2) 1号配石の遺物

配石周囲からの出土遺物のいくつかを1号配石遺物として報告するが、配石に直接伴うものではない。1~3は上器で掘之内2式期か。4は石鎚。

(3) 1号溝の遺物

1・2は土師器で、1は置き竈の底部か。2は壺かと思われるが時期は不明。

(4) その他の遺物

1~37は繩文土器、38は土製品、39~43は土師器、44~52は石器、53~55は石英自然円礫。

1は纖維土器で、刺突文列下部に半裁竹管による斜格子文を施す。判ノ木山西式（子母口式並行早期後半）か。2・3は前期末、十三菩提式土器で、半裁竹管による押し引き文を施す。十三菩提式土器片は金桜社奥社遺跡でも小破片が出土している。4は五領ヶ台式土器片で、半裁竹管で山形文を施す。5は加曾利E3式上器か。6~33は堀之内式土器で、堀之内2式を中心とする。34~37は晩期、清水天王山式で、沈線により人組三叉文、横位羽状文を施す。同一個体の可能性がある。38は時期不明ではあるが、土器片を用いた小型有孔円板。39~42は平安時代、9世紀後半の坏で、40・42は内面に暗文をもつ。43は土師器壺で、壺と同時期であろう。44~48は打斧で、44は分銅形、他は短冊形である。49は横刃形石器。50~52は磨り石で、いずれも自然円礫を用いる。53~55は石英自然円礫で、堅穴と同様な礫が造構外からも出土している。

第4章 理化学的分析

第1節 中之堀遺跡出土の発泡物質の分析について

杏名 貴彦（山梨県立博物館）

今回、中之堀遺跡出土の発泡物質の分析を行う機会を得ることができた。そこで、内部構造調査をX線ラジオグラフィーにより行った。また、表面の特徴的な部分について蛍光X線分析により元素分析を行った。

その結果を報告する。

(分析方法)

X線ラジオグラフィーによる物質の構造調査

装置：デジタルX線リアルタイム透視装置
(エクスロン・インターナショナル製)

管電圧：160kV

管電流：4mA

蛍光X線分析による元素分析

装置：SEA5230HTW
(エスアイアイ・ナノテクノロジー製)

管電圧：15kV

管電流：自動（黒色部：672μA 白色部：648μA）

測定環境：真空中

測定時間：100sec

(分析結果)



図13 炉内出土の
発泡粘土

X線ラジオグラフィーでは、元素のX線に対する透過度の違いから、その資料の内部構造や元素の分布状態が調査することが可能である。そこで、今回最初に資料の内部調査を行った。

図版17にこの資料の写真像とX線透過画像を並べて示すが、得られたX線透過画像からは、特徴的な影といった像が得られる部分も無く、資料の写真像に比べ非常にコントラストの低い均一な画像であった。この結果から、資料中には鉄といった金属等の元素が濃縮して存在する箇所は無く、全体的に軽元素を中心とする物質から構成されているように考えられた。

そこで、蛍光X線分析を用いて表面の元素分析を行った。測定部位は、白色部分と赤色部分について行った。測定部分の写真と得られた蛍光X線スペクトルを並べて図に示す。

スペクトル中のピークの大小に差はあるが、主要元素として、鉄、ケイ素、アルミニウム等が検出された。これらの結果から、一般的な土壤成分以上の情報は得ることはできなかった。

そのため、今回の調査からこの資料は、炉内部の壁面が熱などによって発泡することで生じたものとの考え方から進めることはできなかった。今後の分析技術等の発展による更なる調査が必要であろう。

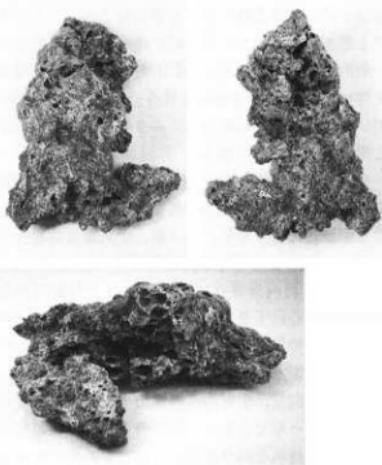


写真1 炉内出土の発泡粘土

第5章 総括

今回の調査地点では縄文後期、堀之内2式期の敷石住居1軒が見つかり、興味深い知見を多数得ることができた。以下、要点を統って調査成果を整理したい。

中久堰遺跡は琴川に面した南西斜面にあり、調査地点付近から下方、南西側に集落の広がりを想定できる。このような集落立地の類例として県内で想起されるのは北杜市須玉町上ノ原遺跡（上ノ原遺跡調査団 1999）である。

上ノ原遺跡は、小河川に面した南向き斜面に等高線に沿って2~3列の帯状の住居列が東西に長く並ぶ。住居群は東西2群からなり、東群上列中央にC1号住が、また西群上列中央にC77号住がそれぞれの住居群を見下ろすように存在する。中久堰例と類似するのはそうした立地に加えて壁面に周堤礫をもつこと、居住者の優位性を示すような遺物が出土していることである。C77号住は壁面に礫を多数積み上げた周堤礫をもつ敷石住居で、直径7×8mの隅丸方形を呈し、炉周辺と柱穴列付近にのみ部分敷石を敷設する。やや大型で敷石の敷設状況も類似するが、時期が堀之内2式～加曾利B1式で、竪穴の平面形態が隅丸方形なのは中久堰例よりも後出的である。ヒスイ製玉が2点出土している点は特筆される。上ノ原C1号住は約6mの楕円形で、奥壁を中心に周堤礫をもち、出入り口に廊下状の敷石を敷設する。特殊遺物に玉、小型石棒2点、ミニチュア土器がある。通常、周堤礫を伴わない敷石住居が一般的な中で、堀之内2式期36軒中2軒のみ周堤礫を伴い、さらに特殊遺物を伴う点、石井寛（1994）のいう「核家屋」に相当し、ムラ長的な居住者の家と考えてよさそうである。

なお、県内での周堤礫をもつ敷石住居としては大月市塩瀬下原遺跡1号住が著名である。琴川に面した段丘面縁辺部に立地し、上ノ原、中久堰と共に通性がある。いわゆる環礁方形配石遺構で、直径9.5mの円形配石と屋内壁寄りに小礫による方形配石があり、炉を中心には十文字の敷石を敷設し、壁際には崩落した状況で周堤礫が出土している。時期は堀之内2式期で、出土遺物には石棒、玉、土偶などがある。中久堰遺跡同様、1軒のみの検出のため集落内での位置づけは不明であるが、住居の背後に弧状の配石があり、集落域を囲う環状配石としての展開を推定するならば、傾斜面最上部の住居といえる。これら

の諸例は中久堰遺跡の集落構造を考える上で参考になる。

中久堰遺跡の住居形態はいわゆる柄鏡形敷石住居で、直径8.5mのほぼ円形の主体部に出入り口部を作り、主軸方向を斜面下方に向ける点は各地の敷石住居と同じで、出入り口を必ず低い間に設け、雨水対策を講じるのは、この時期に一般的である。

中央や手前には火があり、複数の炉体土器を埋設する。敷石は炉周辺、出入り口側の主軸線上、出入り口付近、右壁の一部で、そのほかに円礫を直線的に配した列石が奥壁付近にある。柱穴は壁寄りに円形に配置し、柱の立て直しが認められ、新しい柱は火災を受けて柱痕が炭化状態で遺存する。柱穴配置、上屋構造は不明ではあるが、17本程の柱で梁を連結するらしい。堀之内2式期の敷石住居では上ノ原C77号住、塩瀬下原1号住のように方形化へ向かう時期であるが、本例では古い形態を留めている。部分的な礫石をもつのはこの時期の特色で、堀之内2式期以降、加曾利B1式期には全面敷石例ではなく、廊下状の部分敷石が多い。北杜市高根町社口遺跡19号住もその典型例である。炉内に炉体土器をもつのも本時期的一般的な傾向ではあるが、複数埋設した例は少なく、上屋の建て替えに伴う重複と考えられる。

小円礫による列石は柱穴平面図と重ねてみると、柱穴のほぼ中央を通るように並ぶことがわかる（第2図）。柱を結ぶ線状には屋内と壁寄り空間の境として間仕切り、あるいは段差があったことが想定でき、そうした部分を視覚的に明確化する目的で、または装飾的な意味合いをもって並べたか、あるいは柱間の仕切り壁下部の基礎構造、隙間を埋めるような詰め石と思われる。列石の配置は環礁方形配石遺構の壁際に配置された小礫群との共通性が伺え、時期的に本例のような列石タイプが先行するものか、あるいは地域性として把握できるものか十分な検討を要するが、同じ性格をもった屋内施設として理解できよう。環礁方形配石遺構の小礫は床面からやや浮上し、火を受けた例が多いことなどから、山本輝久が主張するように、廃絶儀礼のなかでの人為的な行為によるものとみなす説があるが、中久堰例も列石が床面から浮上し、火災住居である点は状況が同じである。しかし廃絶後の儀礼に伴う配石設置をあえて想定する状況ではなく、石井らが説くように住

居内施設として理解する方向をとりたい。

小円礫は列石のほかに1堅覆土内から多数出土し、計703点、1堅以外で43点を数える。遺跡内に自然に散布するものではなく、遺跡付近よりも下流の河原から採集した円礫が搬入礫として持ち込まれたものと考えられ、中には石英の不透明白色礫もあることから、見た目で選択されたことも考えられる。なぜ小円礫が覆土中に多量に存在するのか不明であるが、住居の上屋などに構築材として用いた可能性も想定しておきたい。また覆土中の多量の礫に対しても周堤礫以外に上屋構築材の一部としての利用を考えることもできる。

山本が意図的な火入れ行為を想定するように、敷石住居にはなぜか火災住居の確立が高く、本例のように柱痕部分が炭化して残った事例も各地にある。それらによれば柱をつなぐように炭化した横材が検出されることがあり、本例も奥壁の一部に焼土とともに横たわる炭化材が見つかっている。アイヌの民族誌を参考にするならば、死者（とくに女性）があの世で生活できるように家を焼いて持たせるという事例がある。

単なる火災住居として片付けられない理由に、床面の著しい焼土化、発泡粘土、発泡土器の存在、焼骨の存在が注目される。これまでにも後晩期の住居には焼骨が伴うことが指摘されており、敷石下層や掘り方からも出土することから、獸骨を焼く動物儀礼が盛んに行われたことが推測されている。本例をみると、炉内や床面からの焼骨の出土が著しいうえ、炉内が激しく被熱赤変し、さらに炉体土器上に高温で発泡状態になった粘土（あるいは土器か）があり、通常の燃焼では考えにくい高温による焼成が起きていることがわかる。この点に関し、後期の堅穴が入り口部を焼き口とする一種の穴窯に近い構造である点に注意したい。つまり斜面下方に出入り口を設けた形態、その立地はもはや窯そのものといってよく、火災が屋内で発生すると、吹き上げる風を受けて内部では自然の状態で異常高温が発生した可能性がある。

後期に発泡土器が出土することは各地で知られ、栃木県では発泡土器として寺野東遺跡の環状盛土遺構で2点、藤岡神社遺跡で火熱によって土中のガラス質が溶結した「受熱発泡塊」43点があり、発泡土器のものもあるという（篠原2007）。また千葉県では三輪山貝塚（流山市）で発泡土器が出ている（千葉県2001）。中期以前には現在のところ未確

認の現象で、やはり火災住居での異常高温の発生による遺物と考えられ、上屋構造、立地の変化に伴う家屋内での火災により、まったくの偶然によって生成された遺物といえる。なお蛇足ではあるが、堅穴の火災をヒントとして縄文時代に穴窯が誕生するチャンスもあったはずだが、陶器生産を試みる発想、金属を生むという発想は縄文時代には生まれなかつた。

出土遺物には上偶、注口土器、石棒、磨き石、石錐など、一通りの遺物が出土している。これらの中で注口土器、土偶、石錐、磨き石、砥石、磨斧が向かって右手前空間から、石棒片、石錐が左手前空間から出土し、磨斧が右手前空間から出土した点を除けば、室内での男女空間の違いを示唆するかのようである。すなわち右手前が女性空間、左手前が男性空間となるが、遺物が原位置を留めることはきわめて少ないとから単純に空間利用に言及することは難しい。ただし床面付近出土の土偶と注口土器については右手前空間の近い位置からの出土で、屋内空間の利用の仕方を示唆している。

土偶は腕が湾曲する有脚タイプと、無脚タイプの2点が出土した。脚部形態に大きな違いがあるものの副部形態は類似性の高い土偶である。腰には帯状の粘土紐を巻き（前者は欠損する）、背面には渦巻沈線文がつく。渦巻文をもつ土偶については後期の特徴ともいえるが、中久堀の2例の類似性は高く、有脚・無脚の2個1対でのセット関係も想定してみたい。また有脚タイプの長く湾曲した腕形態は特異である。後期土偶は通常、横から下向きにL字状に屈曲した腕が多いが、斜め上に伸びる点は中期的ともいえ、あるいはL字状の腕を強調した形態とも思われる。

磨き石（研磨礫）は2点あり、いずれも緑色の蛇紋岩類の円礫を用い、表面には全面に細かい擦痕が顕著である。後期遺跡、とくに堀之内～加曾利B式期に多い資料で、土器内外面を研磨するための石器とする説がある。今後、実験的な比較によって使用痕を観察、分析する必要がある。

その他、中期土器片利用の十製円板は渦巻文を切り取ったもので、後期の中期土器片に対する興味を示す一例といえる。中期の把手を集落内に持ち込み、中期石棒を晩期集落で祀った金生遺跡の事例など同様な例は多い。

縄文時代後期の遺物は調査区全域から出土し、とくに北側では濃密に出土した。集落域が等高線に

沿って北側へ伸びることを示している。

縄文時代後期以外では早期中葉、前期末、中期末、晩期の土器片が少量ではあるが存在し、断続的な活動痕跡が認められる。縄文時代以降では、平安時代9世紀代の土師器片がわずかではあるが出土している。試掘時のT1トレンチ検出の炭化物が平安時代の火災住居覆土の可能性があり、集落が存在したことがわかる。また1号溝は平安時代かそれ以降の溝で、水路の一部である。

近世の遺構には上層検出のピット群がある。とくに建物跡の柱穴列ではなく、ピットに伴う遺物もない。遺構外からは土師質土器皿などが出土しており、現在遺跡脇を通過する農道が古くからの道であったことを物語る資料である。琴川に沿う道は袖ヶ浦金桜神社への室伏と袖口をつなぐムラの道であるとともに御岳道の一部と考えられる。

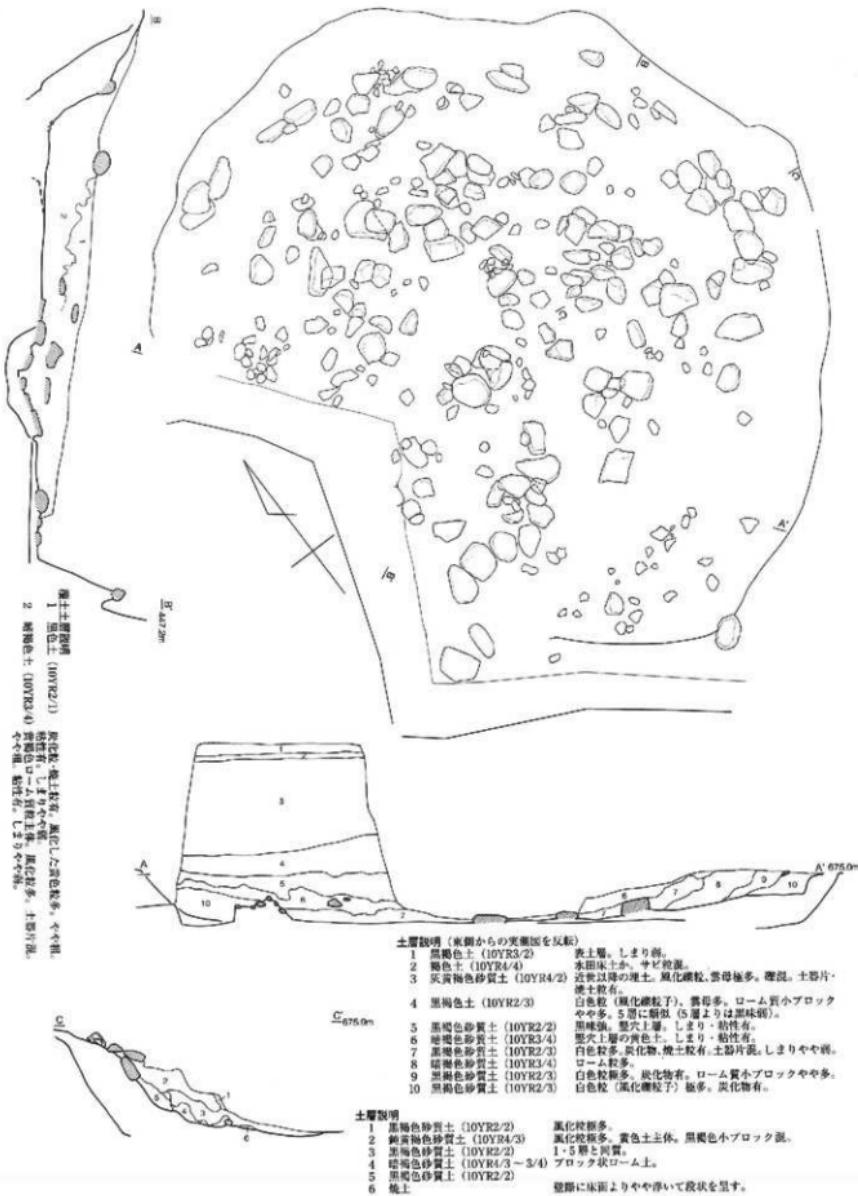
本遺跡では狭い面積にも関わらず縄文時代後期の集落に關し、きわめて大きな成果を得ることができた。中期末以降になると集落が台地面から姿を消すため、気候変動等の理由で集落が衰退したと解釈するのが一般的だが、山間地の斜面に立地を変えて広く進出した集落形態の例が上ノ原遺跡等で明らかになっている。中久保遺跡の成果もまさにその現象を

裏付けるものとなった。山梨市牧丘町内では古宿道の上遺跡でかつて同時期の住居跡が見つかっていることから、河川流域の台地線辺や斜面を中心に、各地で堀之内式期の集落が分布することが考えられ、今一度、広域的な視野での縄文後期段の見直しを迫られているといえよう。

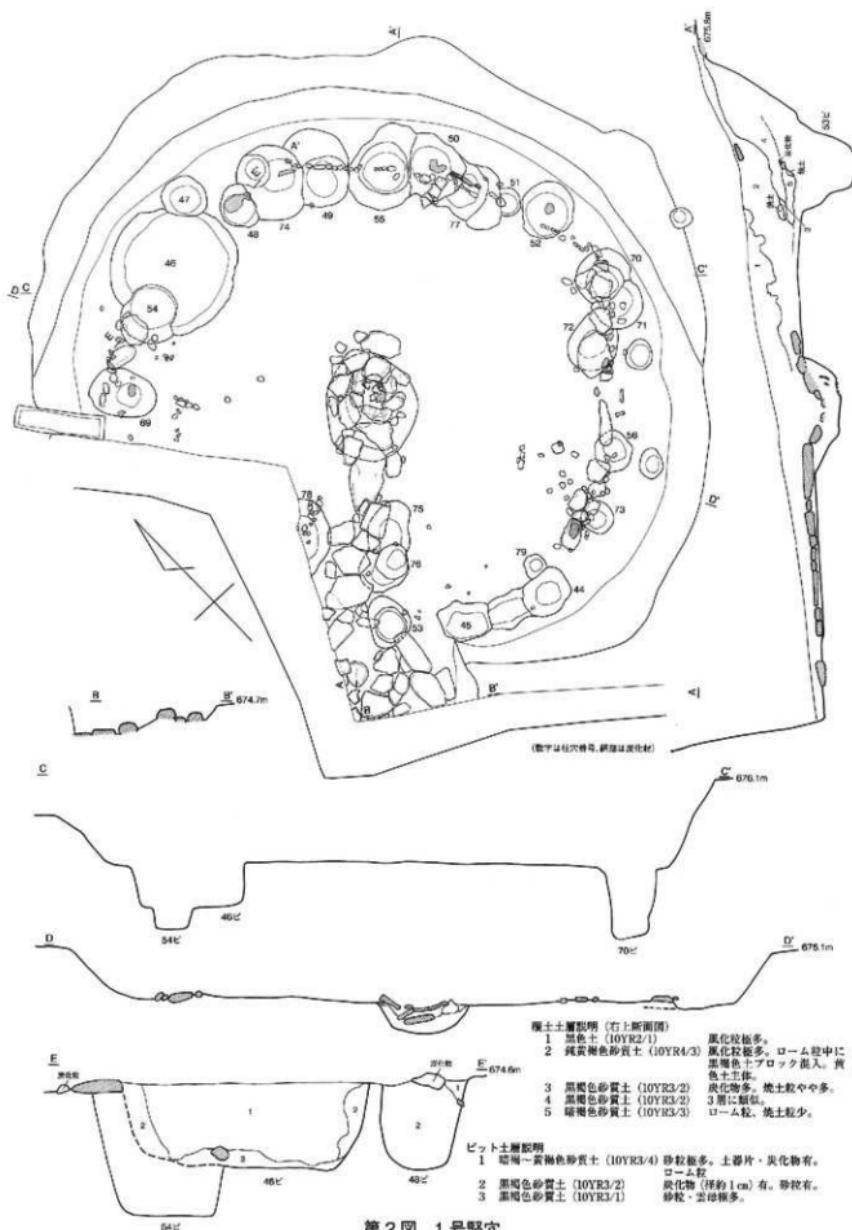
最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、山梨市水道課ならびに教育委員会および職員の方々、調査および整理作業に参加していただいた作業員の方々にはご理解、ご協力賜わりました。心より感謝申し上げます。

【参考文献】

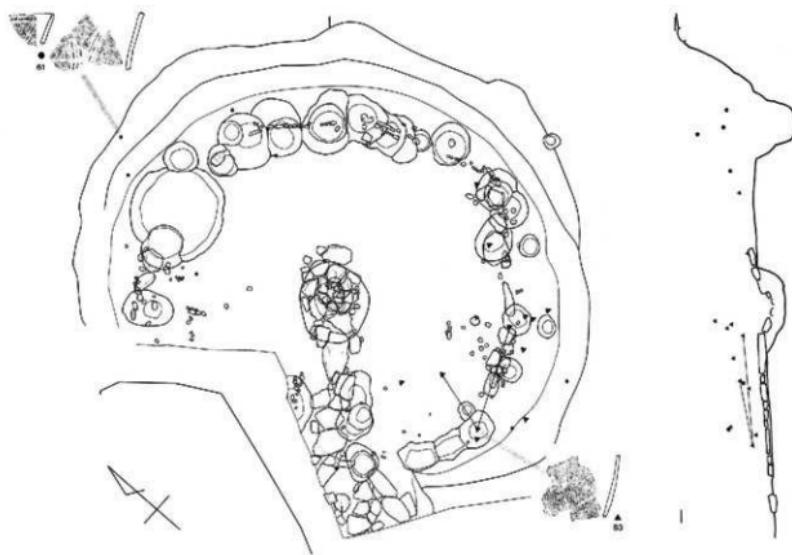
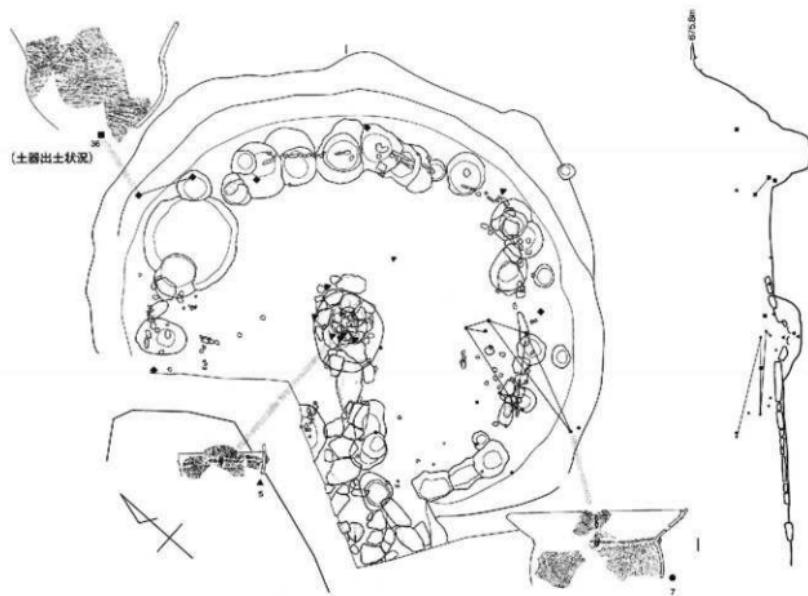
- 石井寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心にして—」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
上ノ原遺跡調査団 1999 「上ノ原遺跡—ダイワグインテージゴルフ俱楽部造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書—」
山梨県教育委員会ほか 2001 「猪瀬下原遺跡(第4次調査)」
千葉県文化財センター 2001 「主要地方遺跡・野田線住宅地開発埋蔵文化財調査報告書—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前一」
山梨県考古学協会 2002 「土器から探る縄文社会」2002年度研究集会資料集
益原浩志 2007 「発泡土器」『研究紀要15—栃木県の埋蔵文化財と考古学—』 とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財センター



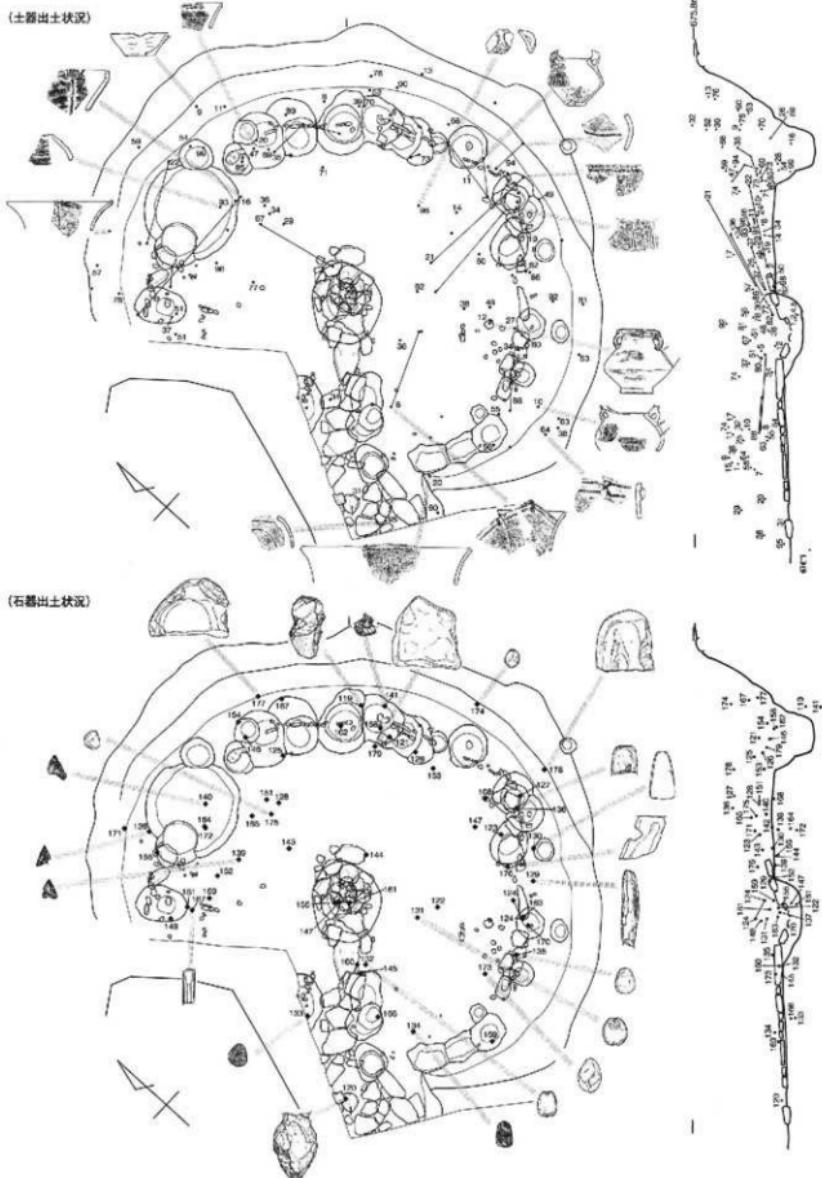
第1図 1号豎穴



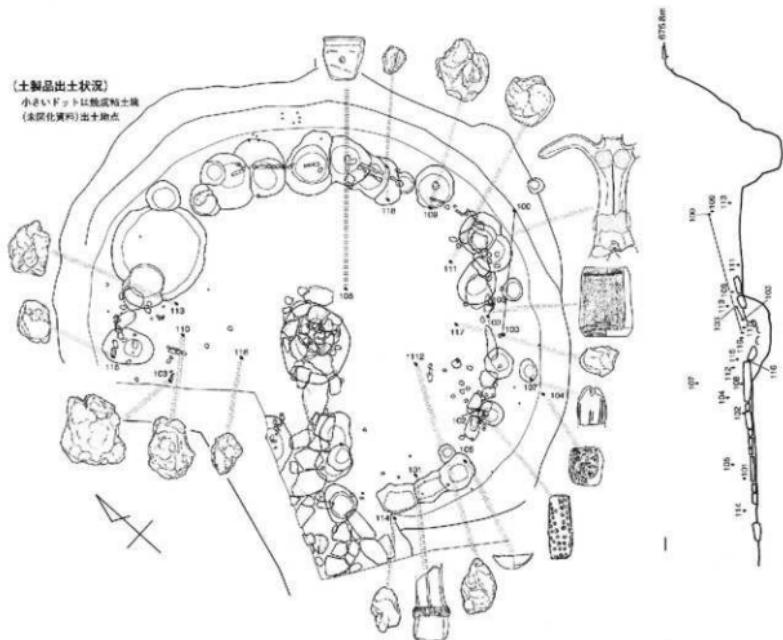
第2図 1号竖穴



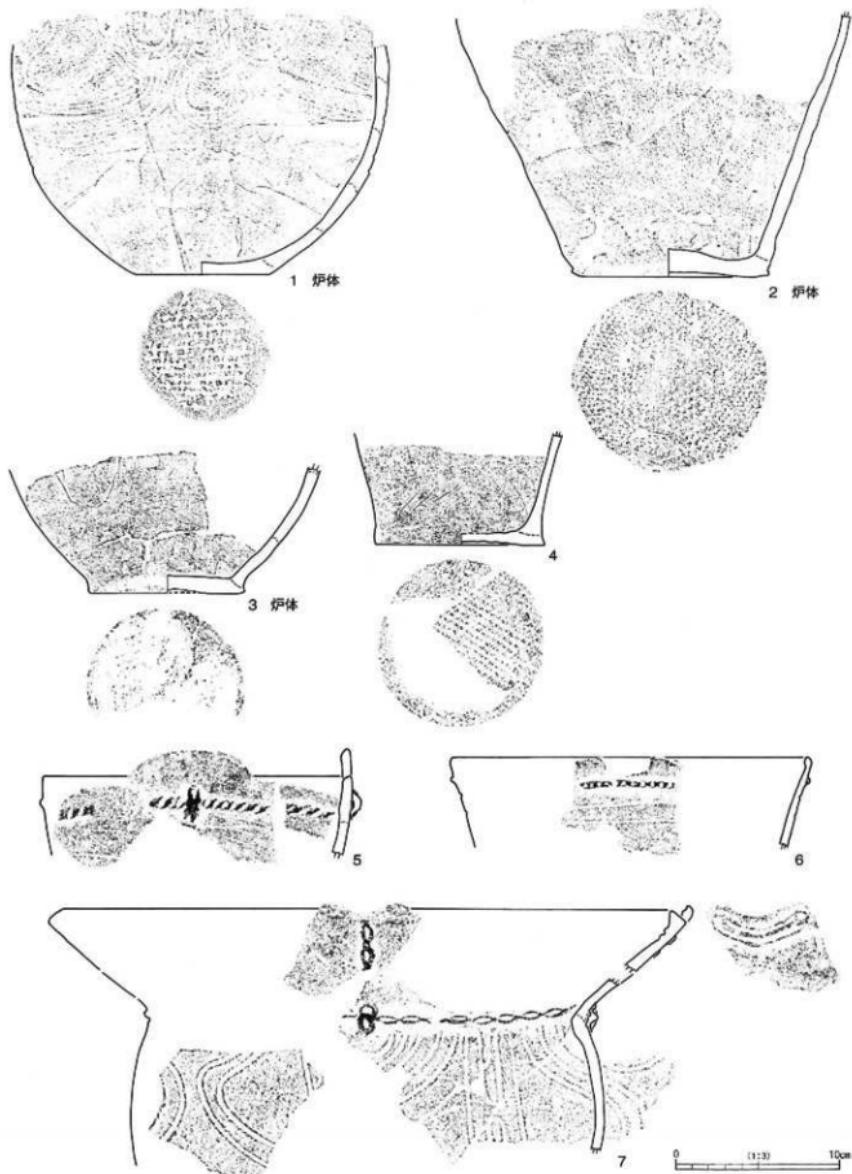
第3図 遺物出土状況(1)



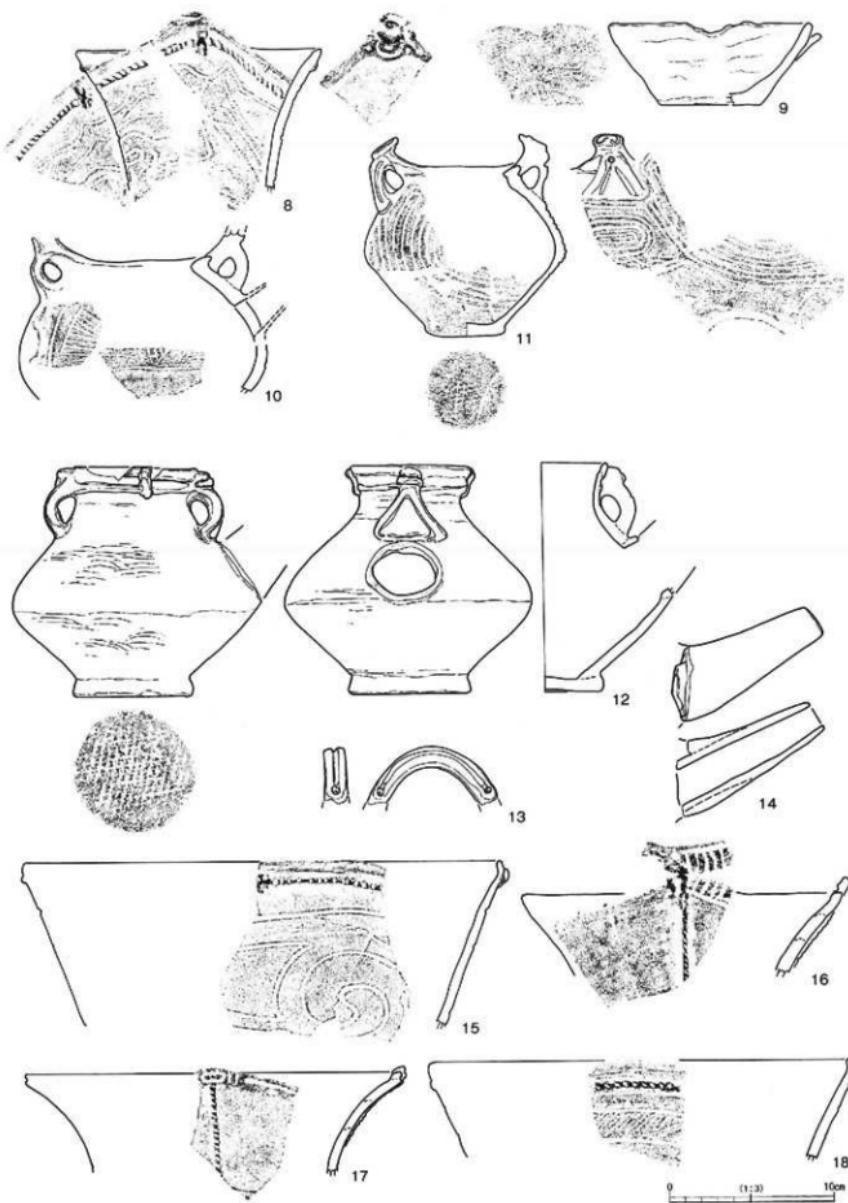
第4図 遺物出土状況(2)



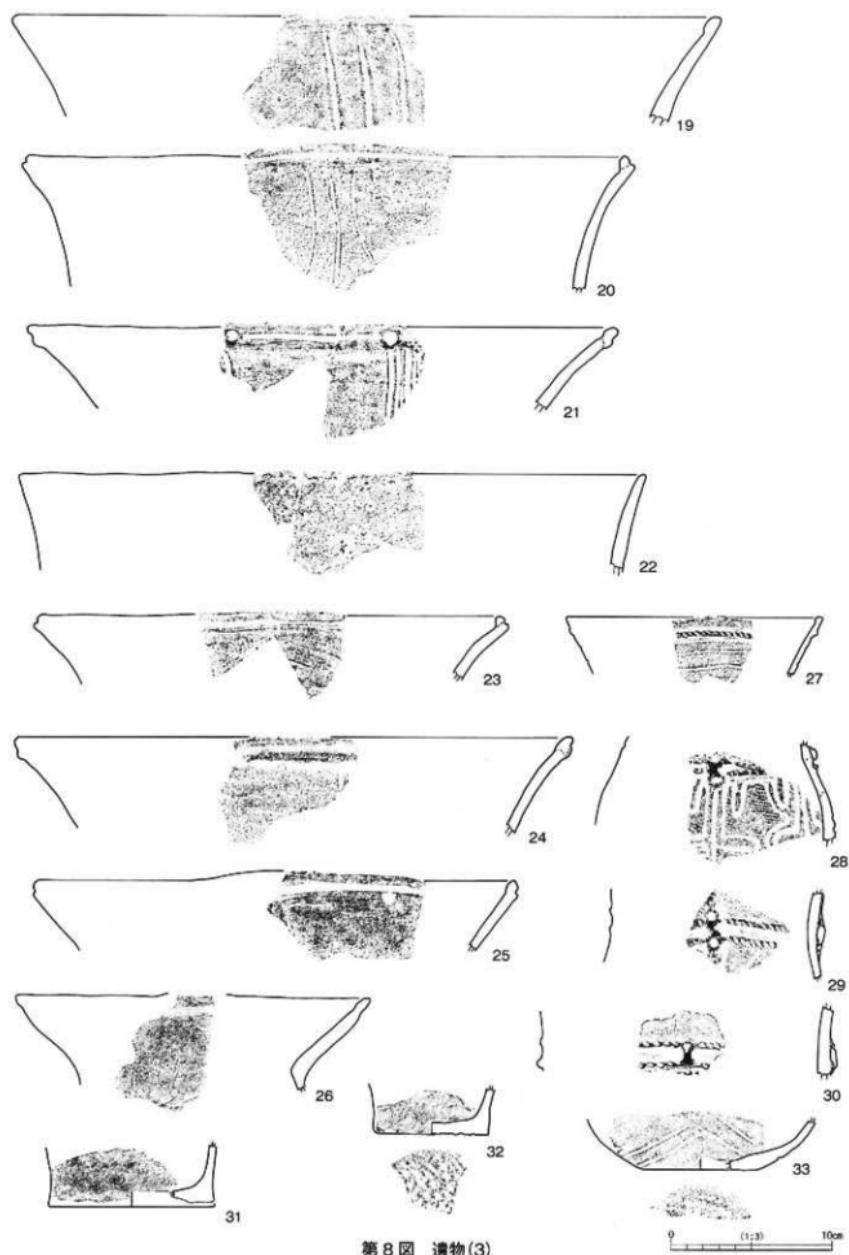
第5図 遺物出土状況(3)



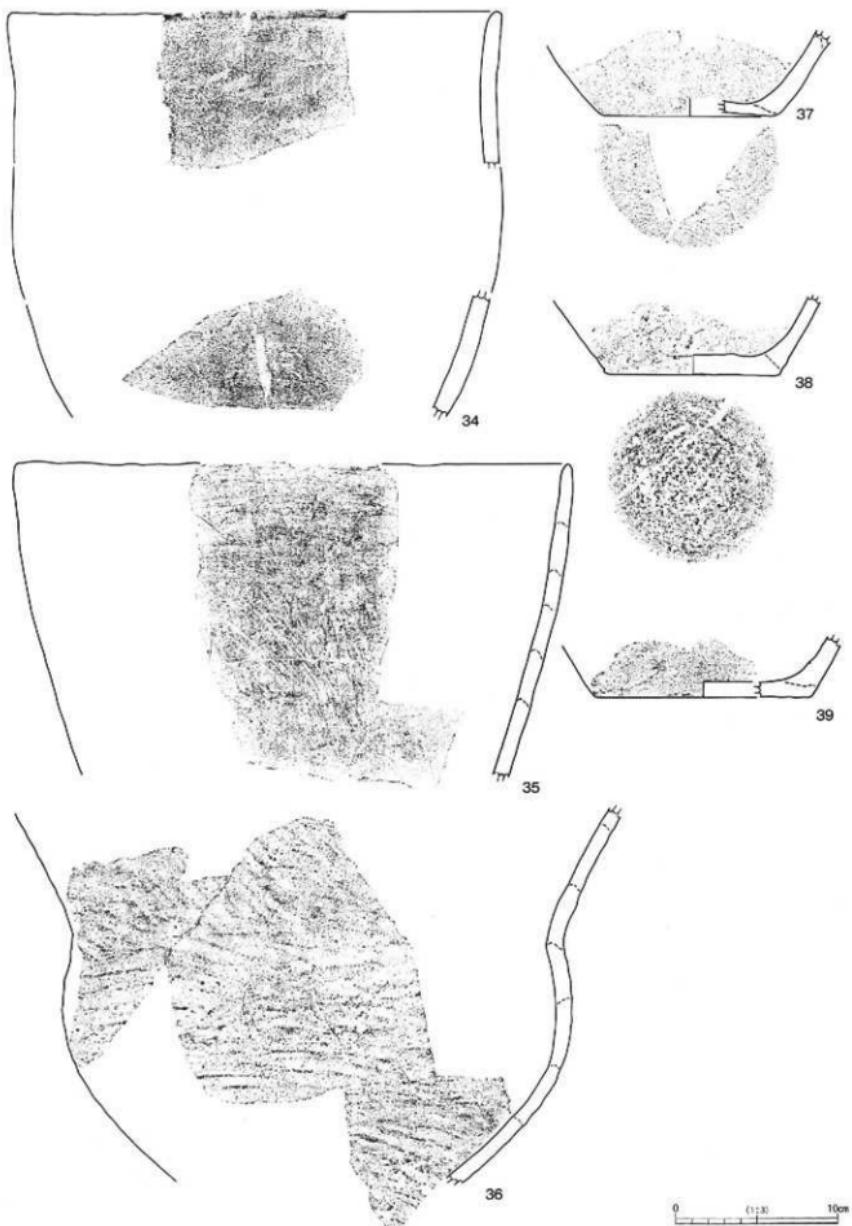
第6図 遺物(1)



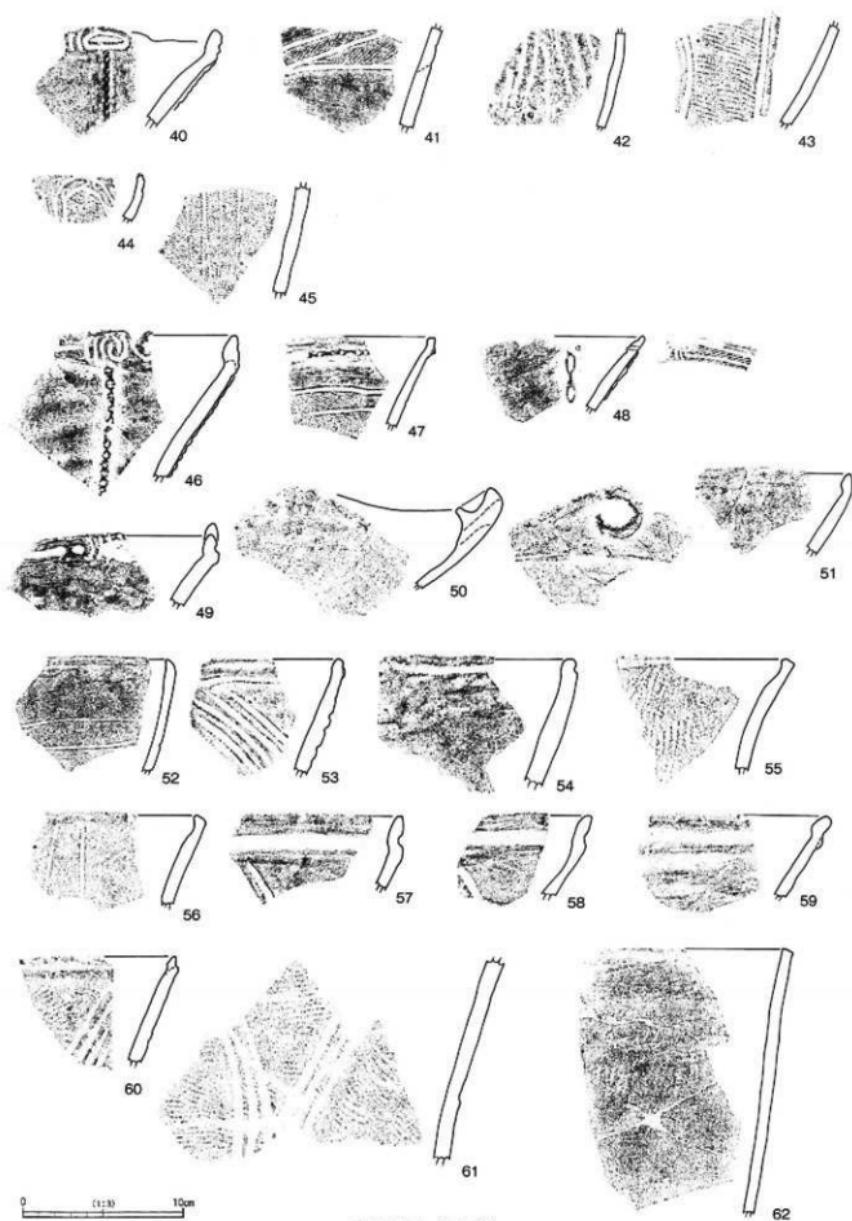
第7図 遺物(2)



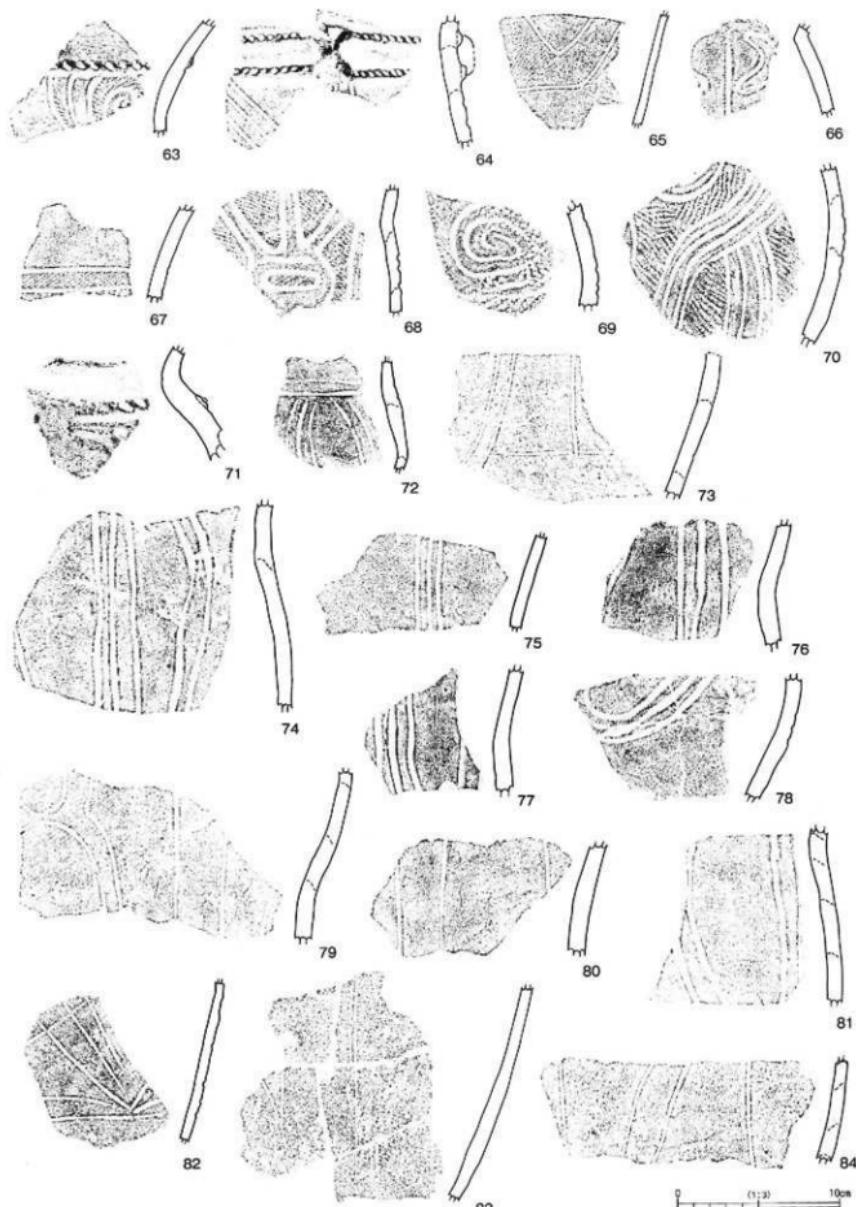
第8図 遺物(3)



第9図 遺物(4)

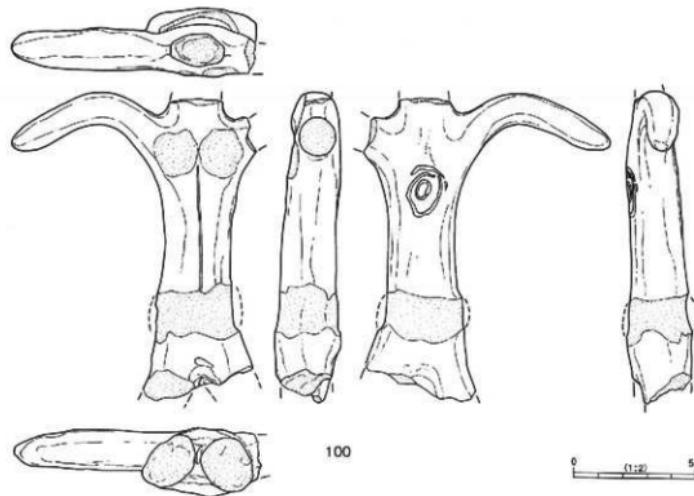
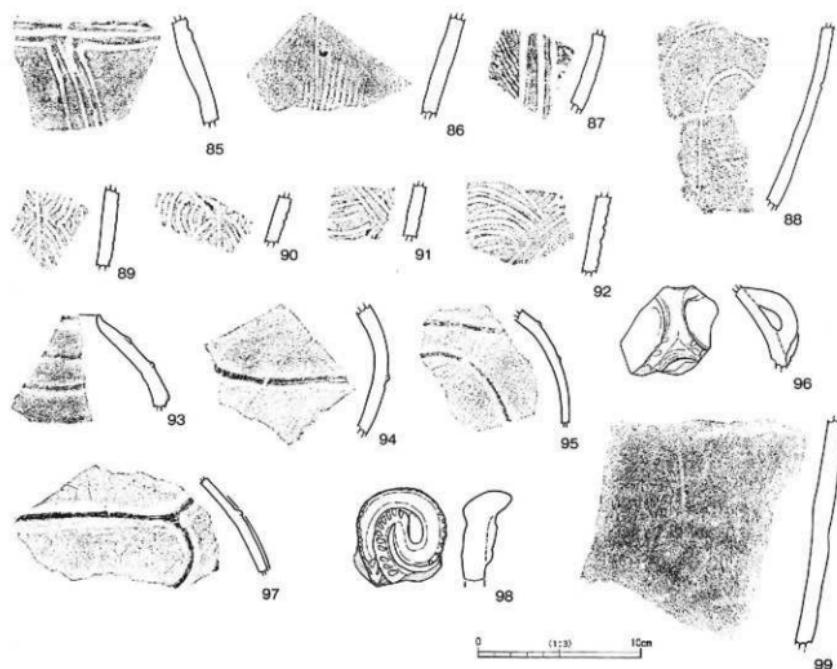


第10図 遺物(5)

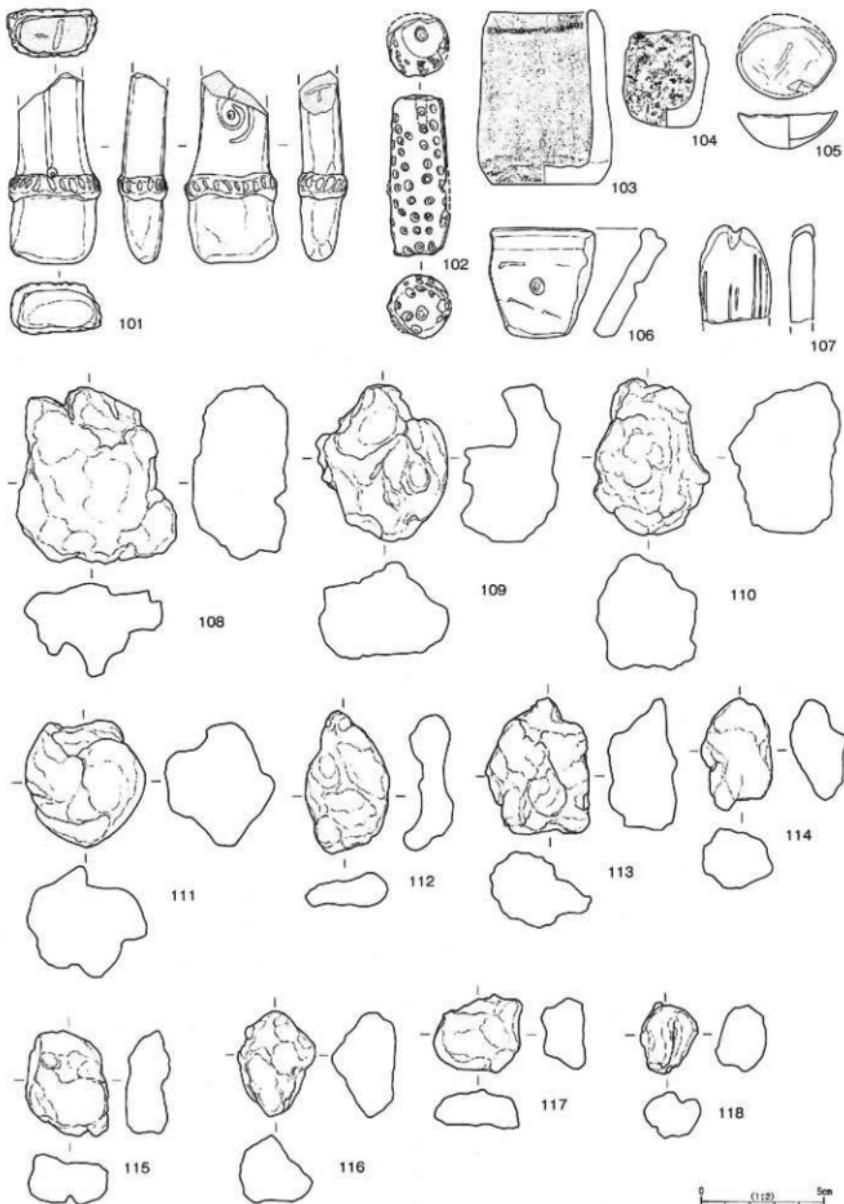


第11図 遺物(6)

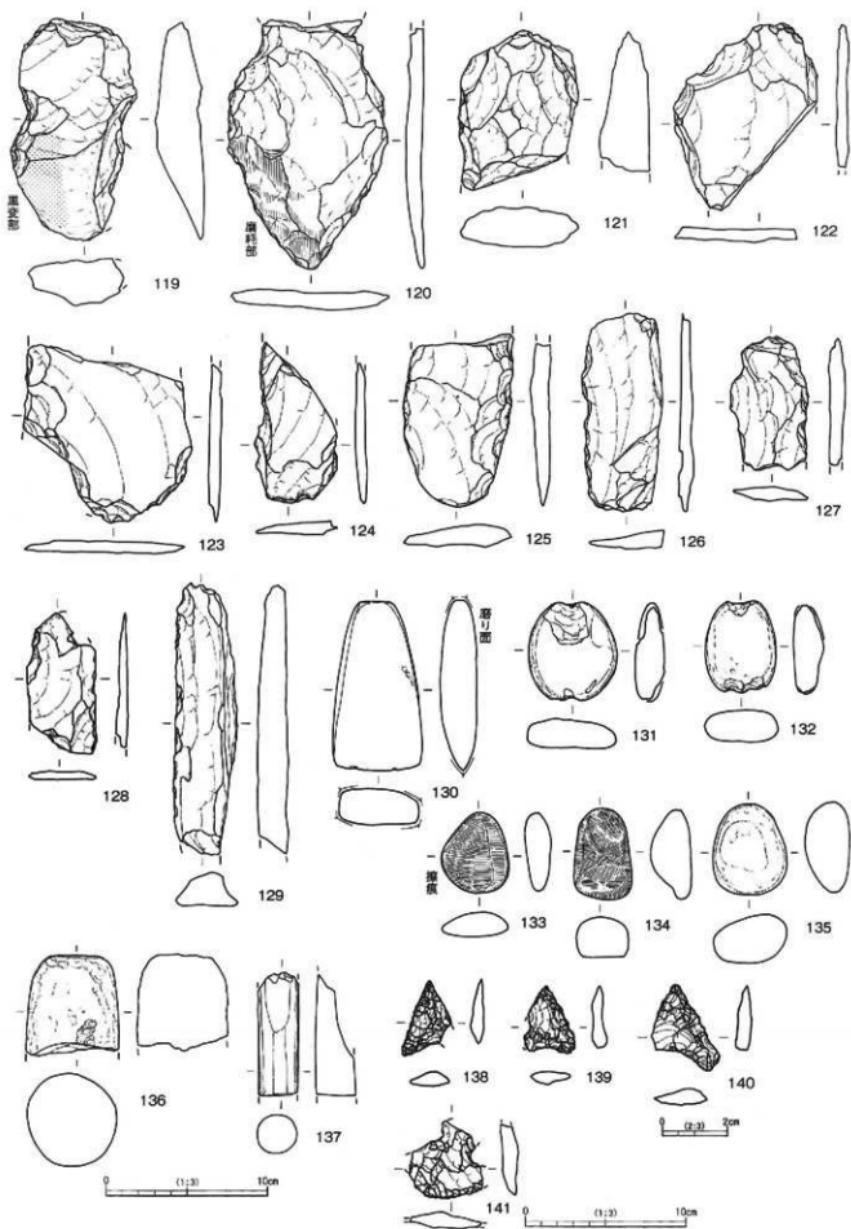
0 (1:10) 10cm



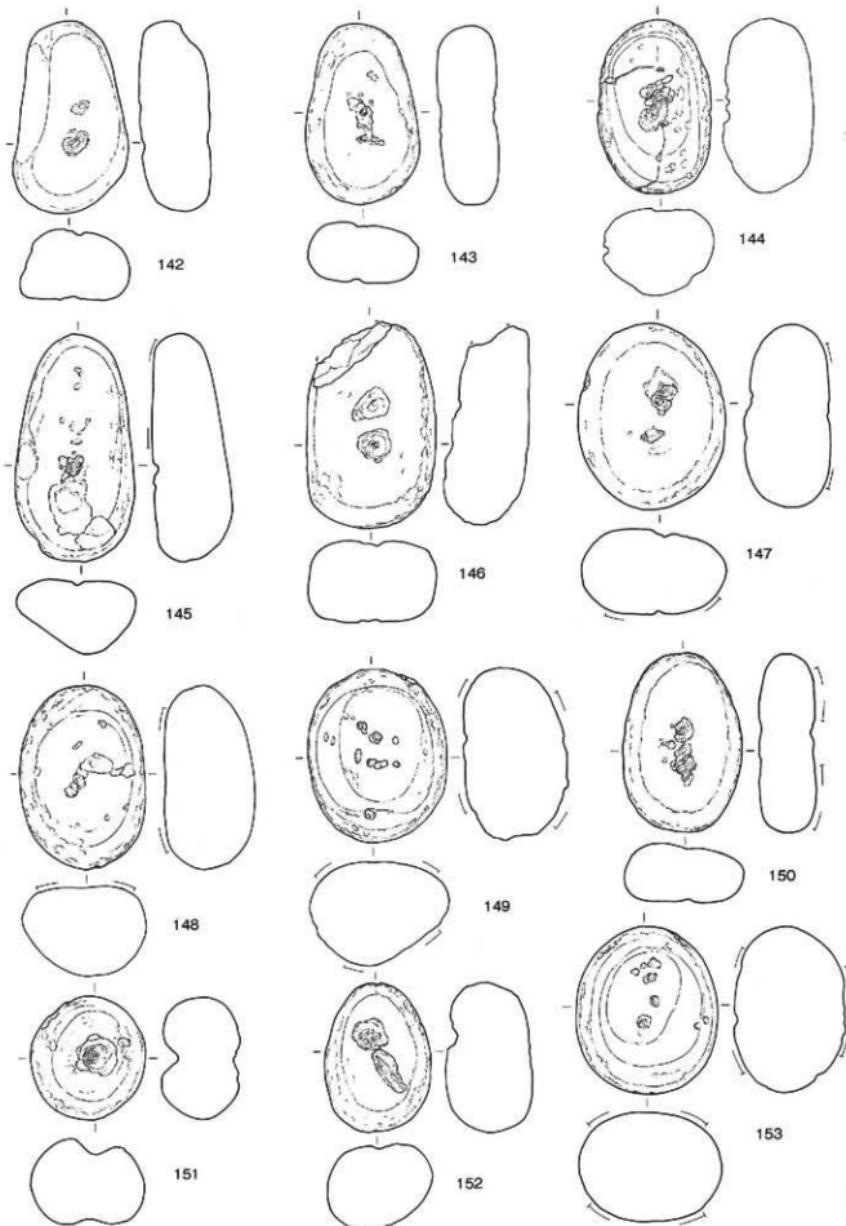
第12図 遺物(7) (100は1/2、他は1/3)



第13図 遺物(8)

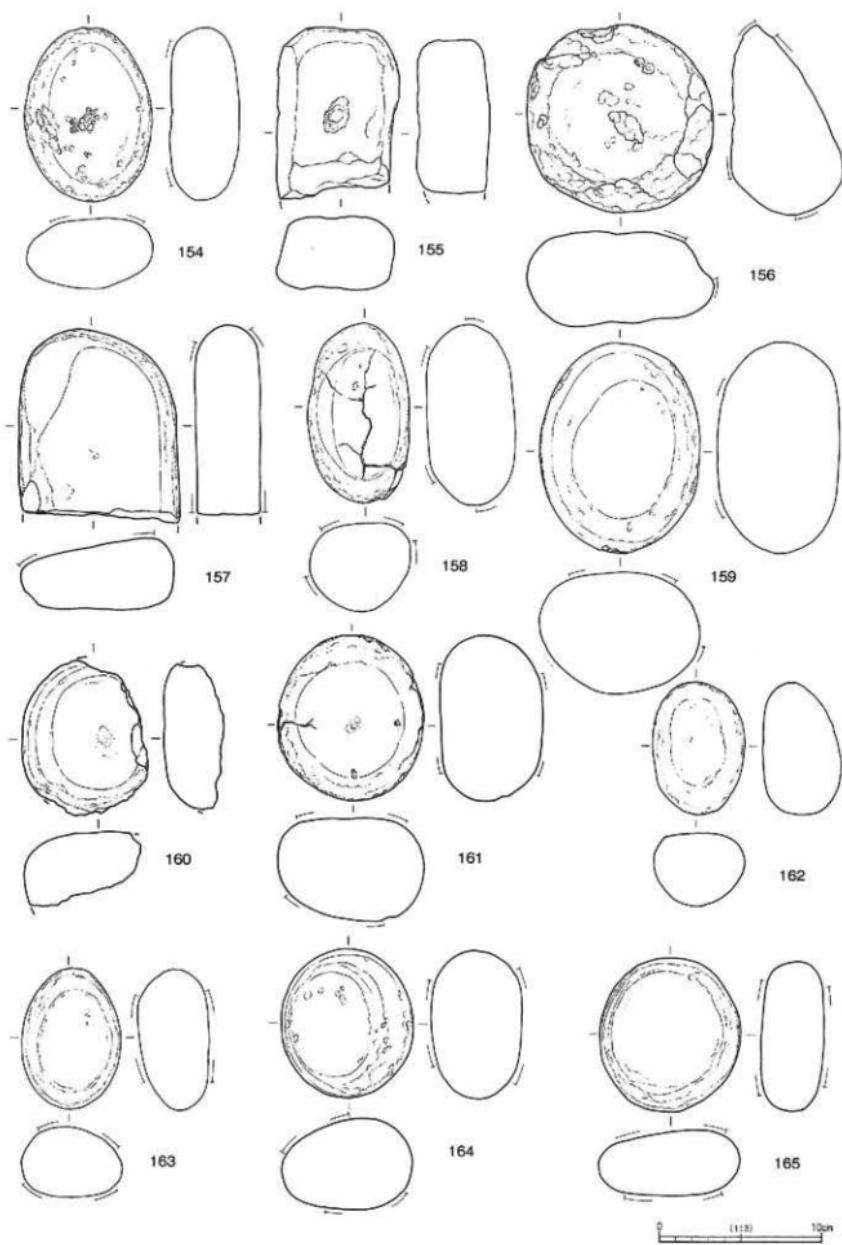


第14図 遺物(9) (138~140は2/3、他は1/3)

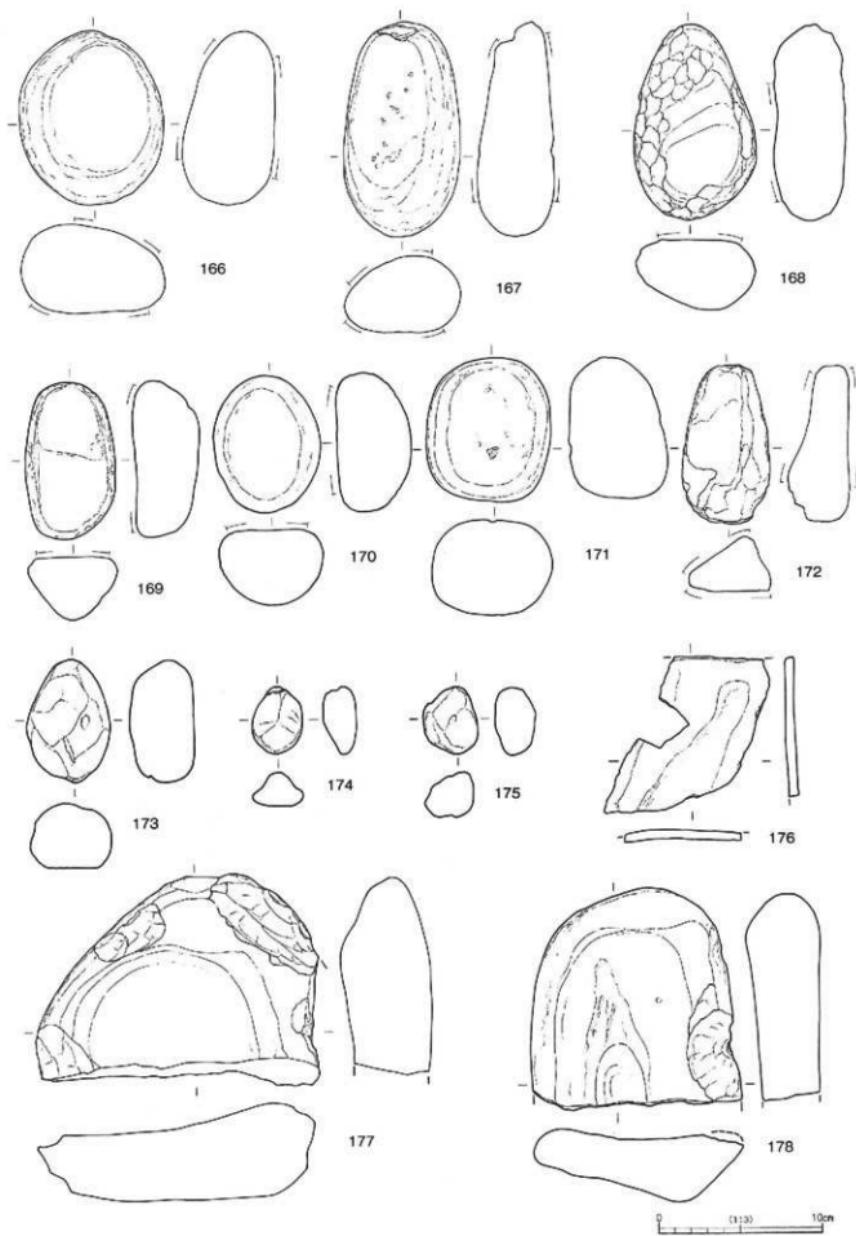


第15図 遺物(10)

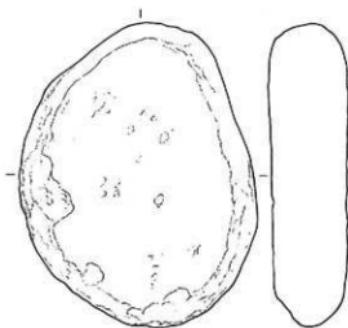
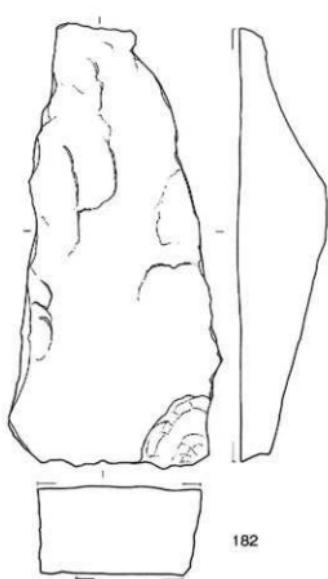
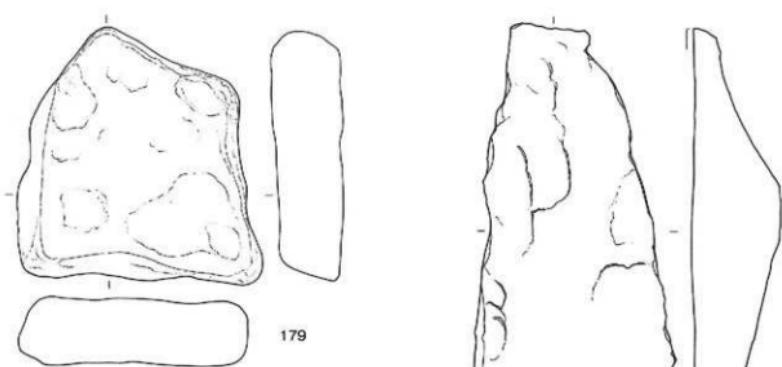
0 (1:3) 10cm



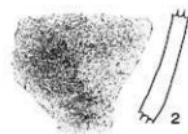
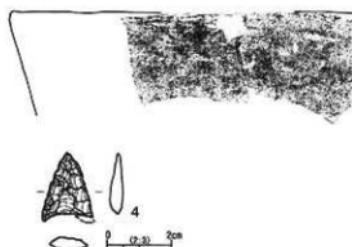
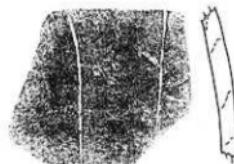
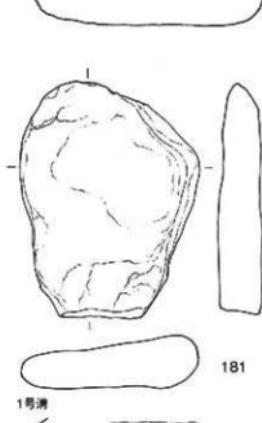
第16図 遺物(11)



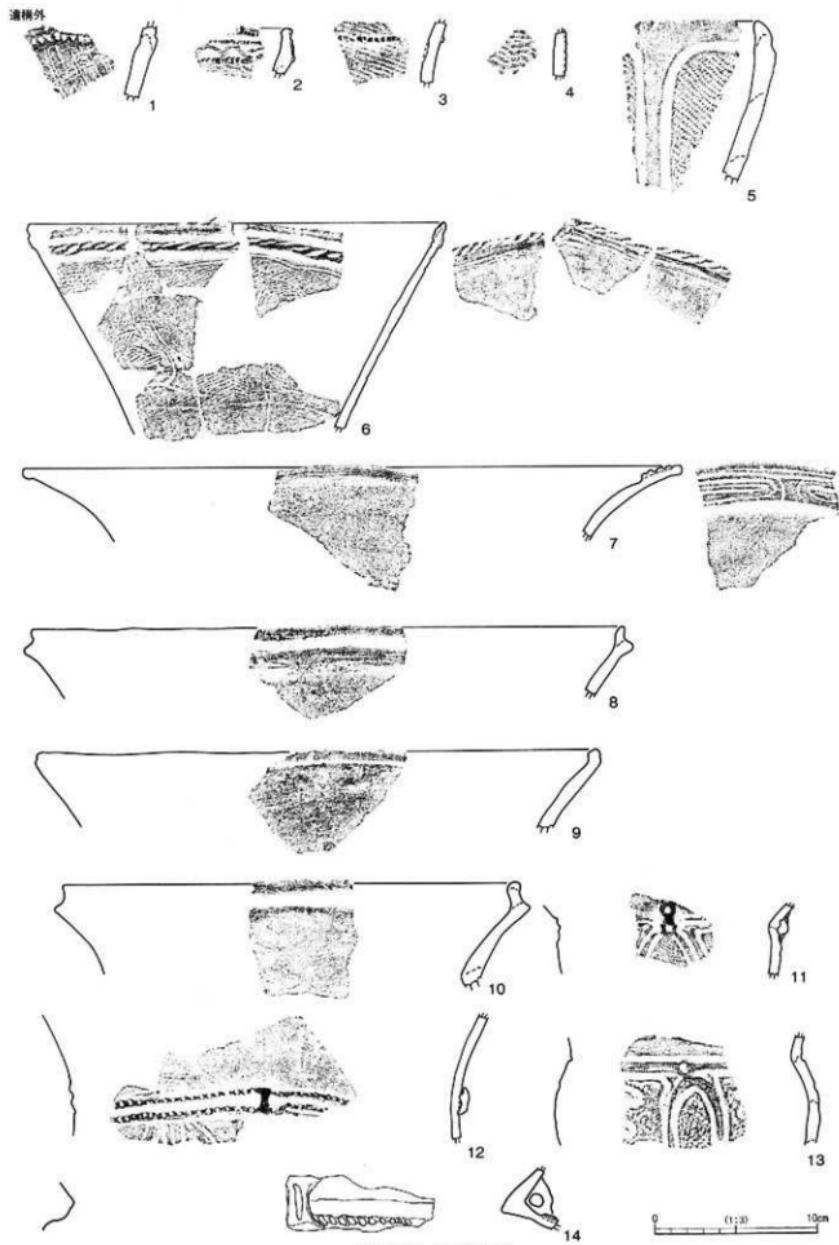
第17図 遺物(12)



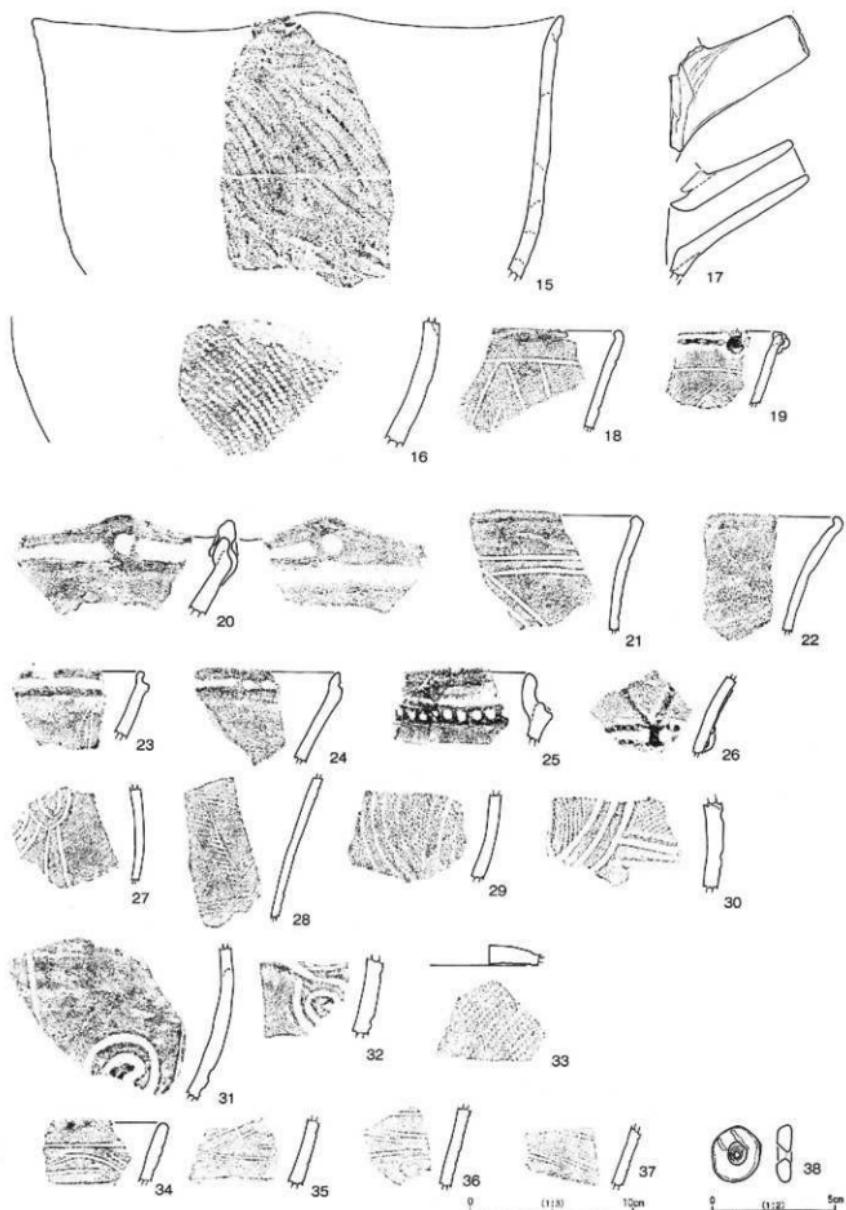
0 (1:10) 10cm



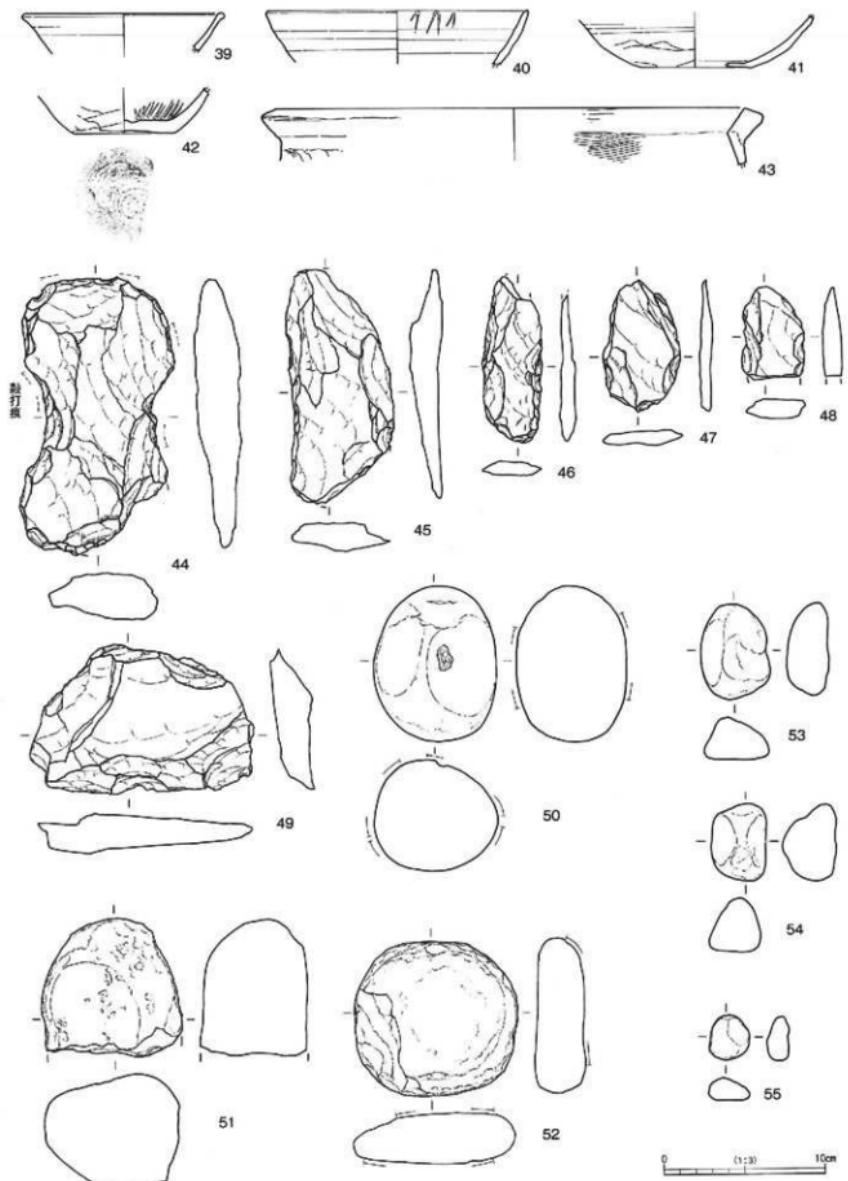
第18図 遺物(13)(4は2/3、他は1/3)



第19図 遺物(14)



第20図 遺物(15)(38は1/2、他は1/3)



第21図 遺物(16)



調査地点遠景（西より、家の前付近）



表土剥ぎの状況



表土剥ぎの状況



作業風景



近世以降のピット半截状況



1号竪穴上層



1号竪穴上層

図版2



ピット群検出状況



ピット群検出状況



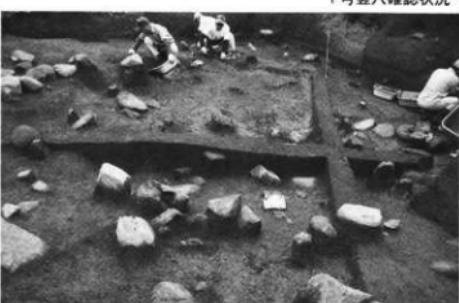
1号溝



1号竪穴確認状況



1号竪穴調査状況



1号竪穴設定のベルト



1号竪穴出入口付近調査状況



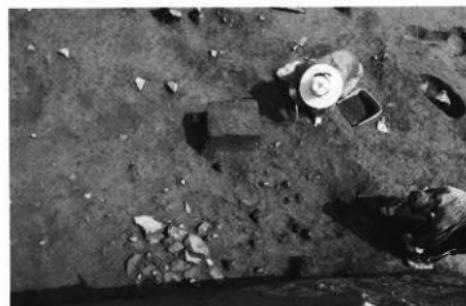
ポール撮影風景



1号竪穴上層検出状況



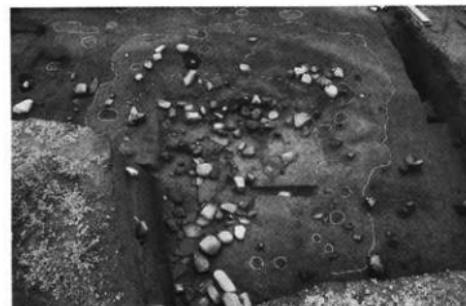
1号竪穴出入口部の配石



1号配石



1号配石



黄褐色土の確認（白線の内側）



1号竪穴出入口部の配石



炉周辺の礫出土状況



1号竪穴内部の掘り下げ

図版4



注口土器出土状況



注口土器出土状況



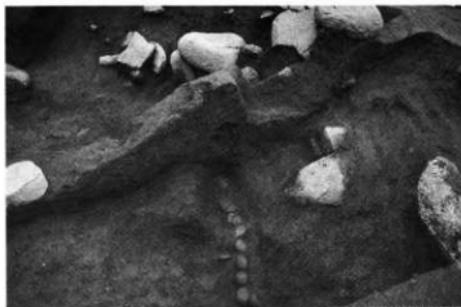
1号竪穴壁面の調査



1号竪穴の堆積土層



1号竪穴壁際の土層堆積状況



円礫検出状況



ベルトの再確認状況



周堤壁、敷石、配石の検出状況



土偶出土状況



カヤ状炭化物出土状況

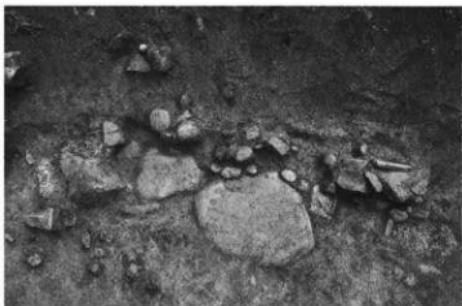
図版6



1号竪穴奥壁の円礫出土状況



炭化物出土状況



部分敷石検出状況



周堤構をほぼ除去し、壁面を確定した状況



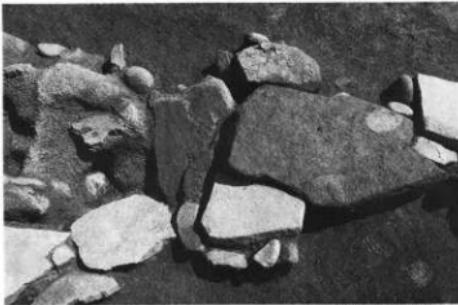
1号竖穴円砾出土状況



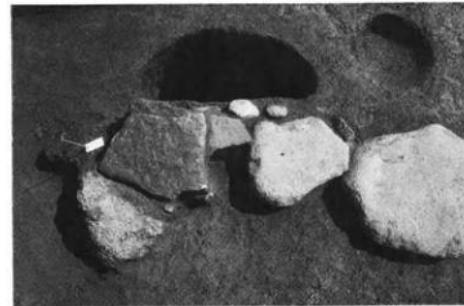
1号竖穴柱穴を探す



1号竖穴炉の敷石



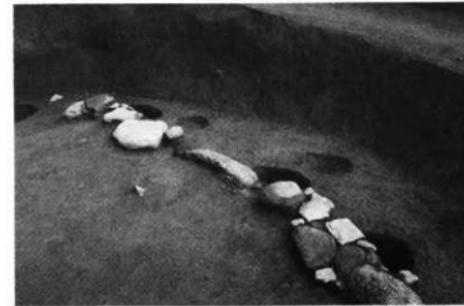
1号竖穴通路部分の敷石



1号竖穴壁寄りの敷石



1号竖穴壁寄りの敷石



1号竖穴東壁の敷石



中央の敷石敷設状況

圖版 8



1号竖穴完掘状况



1号竖穴炉



1号竖穴炉



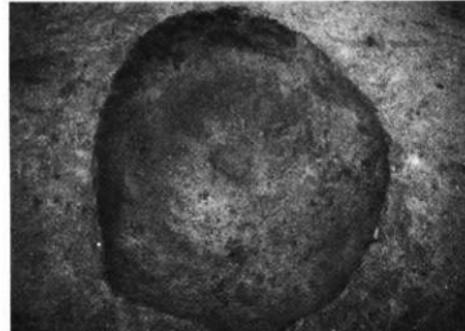
1号竖穴炉



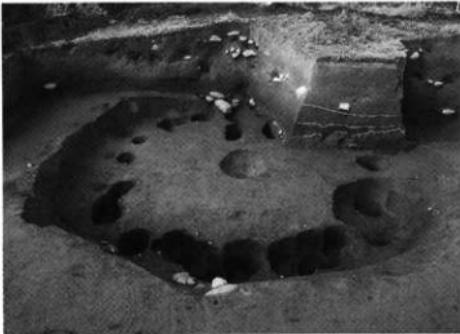
1号竖穴炉



1号竪穴完掘状況



1号竪穴炉



1号竪穴完掘状況

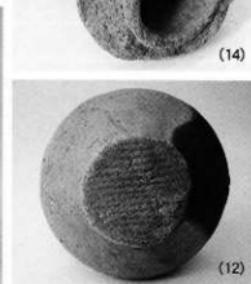
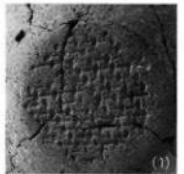


調査終了状況(北より)



1号竪穴完掘状況

図版 10



図版 11



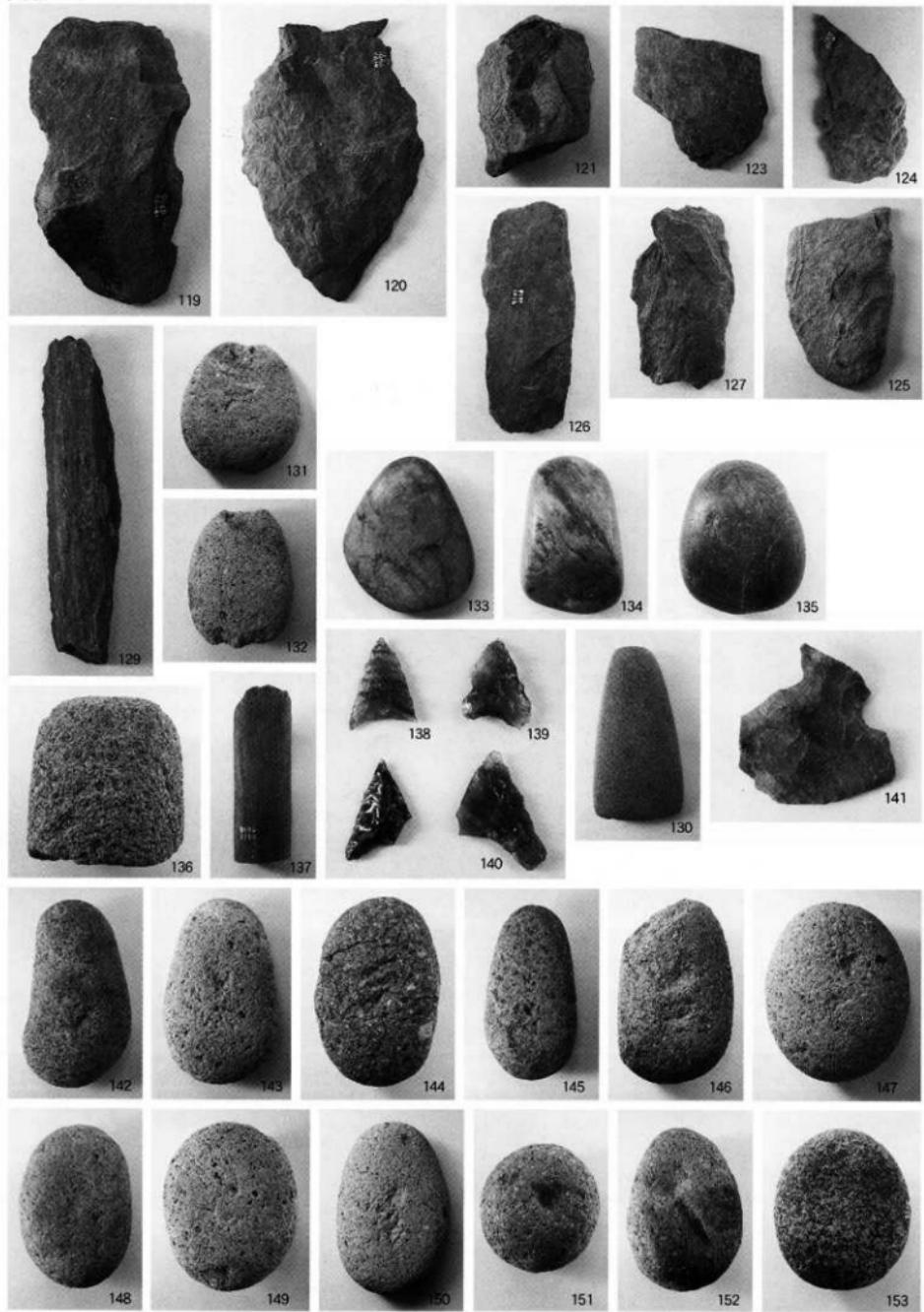
図版 12

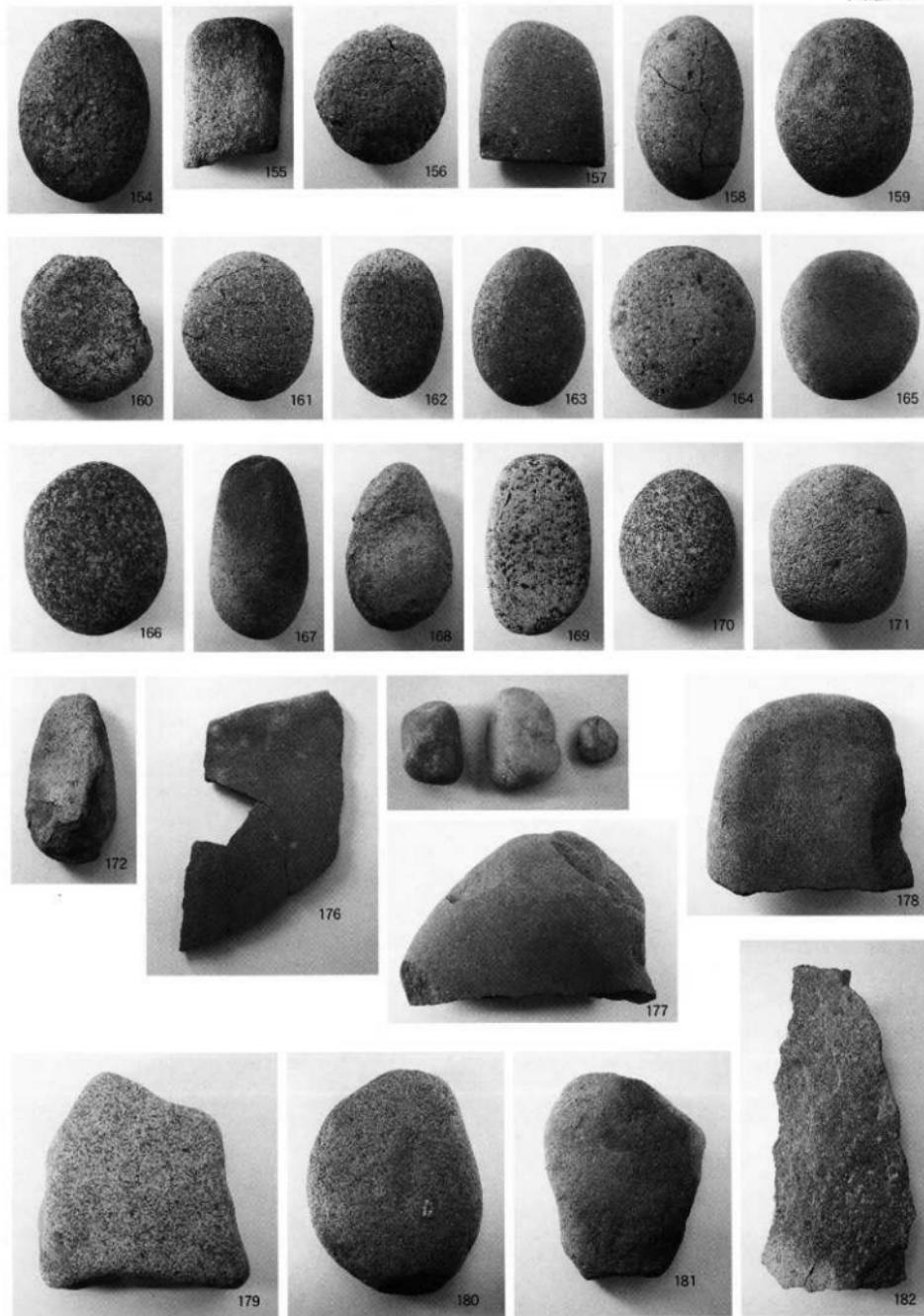


図版 13



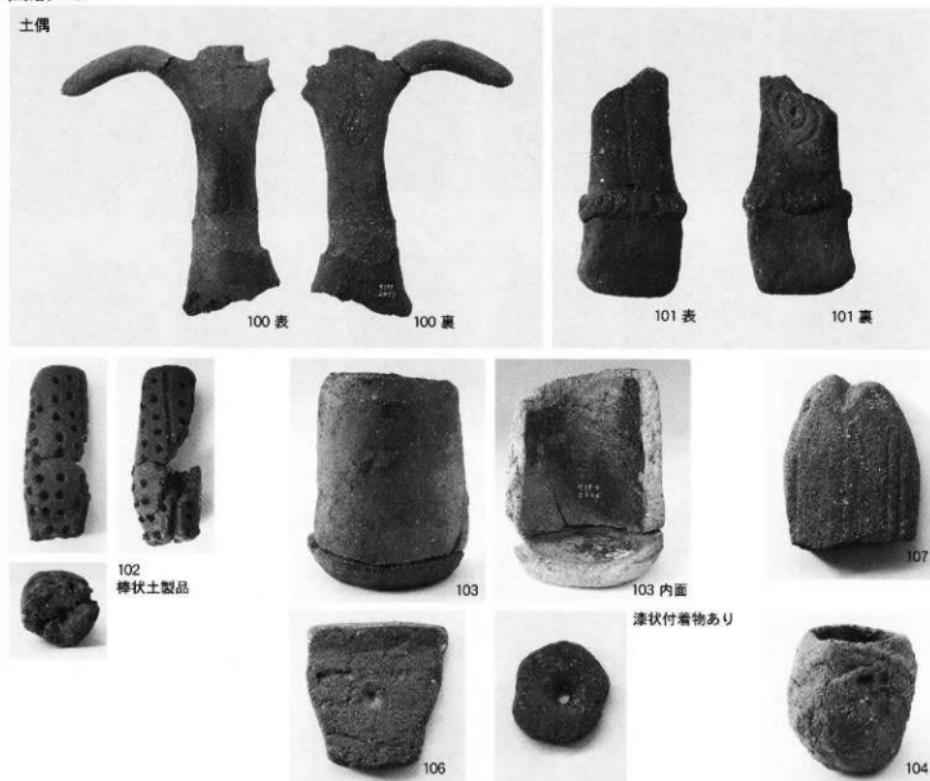
図版 14



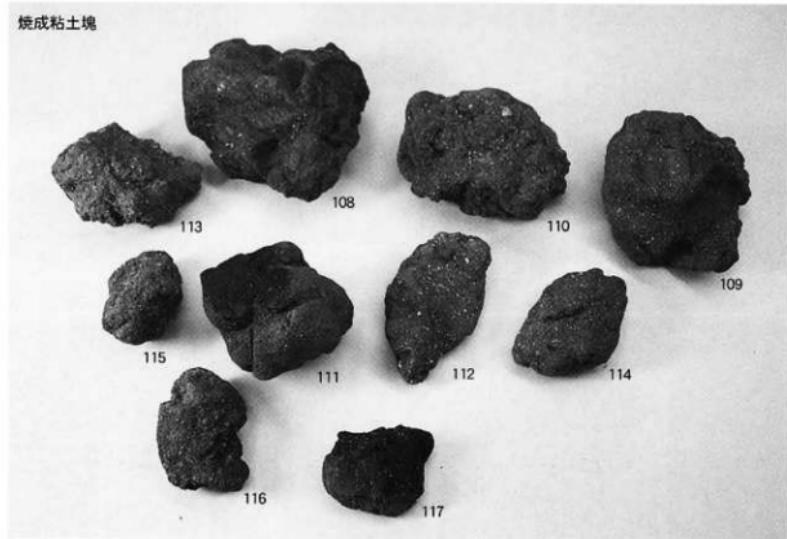


図版 16

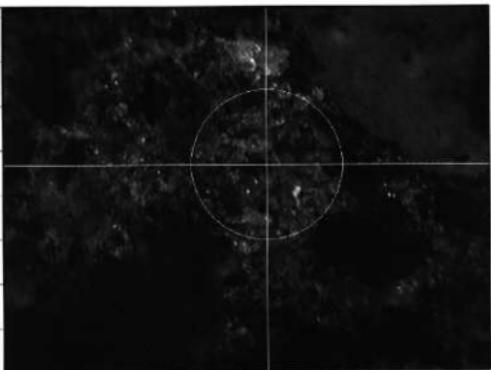
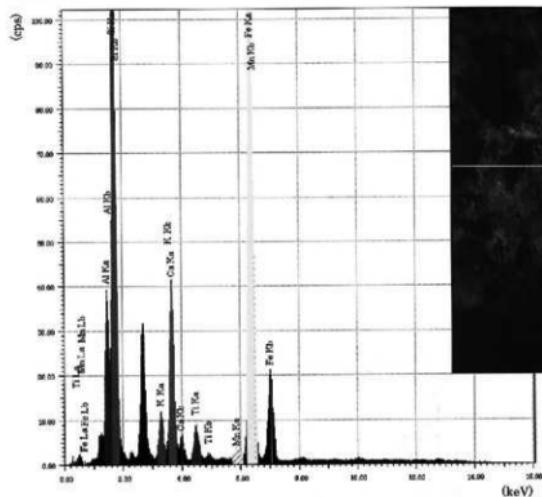
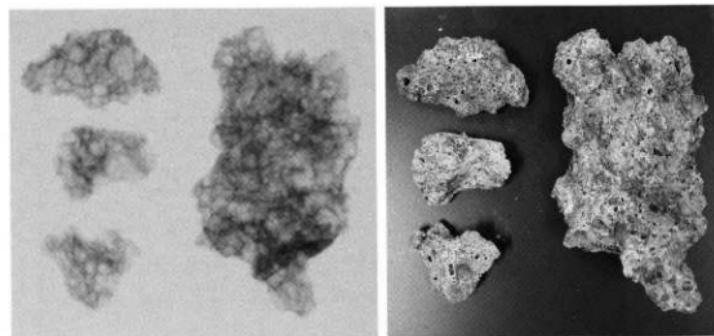
土偶



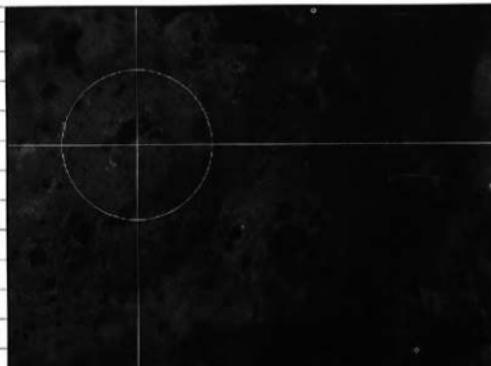
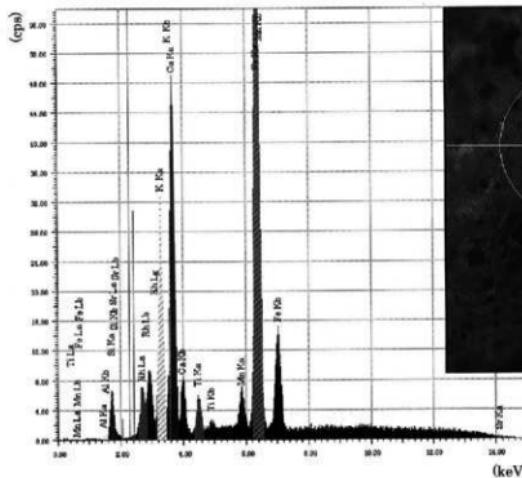
焼成粘土壤



1号竪穴炉内出土発泡粘土
およびX線写真



発泡粘土の黒色部分分析データ
および分析位置



発泡粘土の白色部分分析データ
および分析位置

報告書抄録

ふりがな	なかくせぎいせき
書名	中久堰遺跡
調査名	山梨市牧丘町室伏地内における乙ヶ妻配水池建設にともなう発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	山梨市文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	横原功一
編集機関	財團法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441
発行年月日	西暦 2008年3月25日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
なかくせぎいせき 中久堰遺跡	やまなしけんやまな しまきおかちよう むろぶし 山梨県山梨市牧丘町 室伏 1439番地2	山梨市	09079	35° 45' 49.5946"	138° 42' 29.8770"	2007年 9月7日～ 10月24日	171.8m ²	配水池建 設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	CDの有無
中久堰遺跡	集落遺跡	绳文時代後期	敷石住居	注口土器・土偶・ 石棒・磨き石・ミニチュア上器・棒 状土製品	炉内より発泡粘土出 土	無

要約	绳文時代後期（堀之内2式期）の敷石住居跡1軒の調査。直径8m以上の大型住居で、奥壁側では約1m掘り下げて床面を構築する。円形で、中央に炉体土器をもつ炉があり、炉周辺から人口部およびその間に敷石を敷設した部分敷石の住居である。特異な腕形態をもつ土偶などの特殊遺物や注口土器、石棒などが出土したほか、炉内からは発泡粘土が出土した。
----	---

中久堰遺跡

—山梨市牧丘町室伏地内における乙ヶ妻配水池建設にともなう発掘調査報告書—

平成20年(2008)3月25日 発行

編集 山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441

発行 山梨市・山梨文化財研究所

印刷 株式会社帝京サービス

